

# 旅と都市

## —その喪失と国民国家—

田中 希生

### 序論

#### 第一節 仕切られた時空はいかにして破られるのか

昨日は東関の麓くさみに轡むちを並べて十万余騎 今日には西海の浪にと  
もづなを解いて七千余人。(福原落)

昨日は西海の波の上に漂ひて、怨憎会苦の恨を扁舟の内に積  
み、今日には北国の雪の下に埋れて、愛別離苦の悲みを故郷の  
雲に重ねたり。(「平大納言被流」)

去年信濃を出しには、五万余騎と聞えしに 今日四宮河原を  
過るには、主従七騎に成にけり。(「河原合戦」)

著しいコントラストを描く、隣接した時間。たとえば、昨日と今日、  
去年と今年。平家物語の一節に、時間概念の歴史的变化の可能性を

読み取っていたのは石母田正である。彼によれば、詩や物語にみら  
れるごとく、自然の移り変わりについて、日本人は巧みに表現した。

しかし、人間と人間世界の変化についての表現法を得るためには、  
治承四年五月の以仁王挙兵にはじまる六年間の内乱が必要だったと  
いう。★ここにみられる自然・人為についての紋切り型を差し引くな  
ら、納得できる論理である。こうした社会の劇的な変動なしに、ひ  
とは歴史を描くもうひとつの手法である《叙事》をもちえなかつた  
だろう。厳密には、彼が対比させた詩や物語は、自然の時間を表現  
しているのではなく、時の移ろいについての情を表現している。だ  
から、本来対比すべきは、詩や物語ではなく、クロノロジーにもと  
づく正史である。正史がいかに「暦」に依存していたか。そこでの  
時間は、暦として取り出された「自然」の規則正しい循環、拍節構  
造のなかに閉じ込められている。せいぜい変化をもたらずのは、拍  
節構造に依存したシンクローションくらいものだ。冬の寒さが既

[Article]  
TANAKA, Kio  
Journey and Cities:  
Its loss and the nation-state  
(Received 7 March 2014)

A Noon of Liberal Arts, No. 5, 2014

定の期限をあふれても、ひと回りふた回りするあいだに、「自然」のほうから、さもなければ人間が暦を変えるかして、辻褄は合わせられる。それとは異なり、平家物語にみられるのは、拍節構造という超越論的な場ではなく、抑揚と起伏とに満ちた、その場を占めるひとびとの生活、もつと厳密に言えば出来事のほうを作り出す時間概念である。ナラティヴの区切りを暦に依存した正史よりも、語り手と彼のいる世界がつくる独特なリズムの生まれる叙事にこそ、われわれは歴史に親しいものを感じてきたのである。超越的な時間中心のクロノロジーから、出来事中心の叙事詩へ。歴史のスタイルがここまで大きく変化したということそれ自体が、時代革新のひとつの証拠とみていい。

しかし、出来事は、時間を前と後ろとに分かつだけではない。質的に異なる空間を遭遇させる結節点でもある。だから、もうすこし平家のスタイルに注目してみよう。昨日・今日という時間表現にともなつて、東関・西海、西海・北国、信濃・四宮河原という空間表現が加わっている。これらは京を中心とする座標上のたんなる移動ではない。出で立ちや感情の多様な変化をとめないながらの流浪や亡命、出陣や逃走がたえず空間を異質なものに変えていくのであり、異質さを横切る移動なしには、時間の変化もまたありえない。貴族から武士へ、京から鎌倉へ、此岸から彼岸へ——時代の変化はこうしたひとびとの旅程なしにはあらわれなかつた。

ならば、前近代から近代へと至る、誰もが認める重大な画期には、どのような《歌》が生まれてきたか。たとえば、作詞は長州藩出身

の品川弥二郎、作曲は同藩の大村益次郎（一説に祇園の芸妓中西君尾）といわれる「都風流トシヤレ節」。戊辰戦争を彩る近代最初の流行歌にして初の軍歌でもあるこの曲にも、ひとびとの移動の徴が刻まれている。

宮さん宮さん お馬の前に ひらひらするのは何じやいな

トコトシヤレ トシヤレナ

あれは朝敵征伐せよとの 錦の御旗じや知らないか

トコトシヤレ トシヤレナ

一天万乗の帝王に 手向かいする奴を

トコトシヤレ トシヤレナ

ねらい外さず ねらい外さず どんどん撃ち出す薩長士

トコトシヤレ トシヤレナ

伏見 鳥羽 淀 橋本 葛葉の戦いは

トコトシヤレ トシヤレナ

薩士長肥の 薩士長肥の 合うたる手際じやないかいな

トコトシヤレ トシヤレナ

音に聞こえし関東武士 どつちへ逃げたと問うたれば

トコトシヤレ トシヤレナ

城も気概も 城も気概も 捨てて吾妻へ逃げたげな

トコトシヤレ トシヤレナ

国を追うのも人を殺すも 誰も本意じやないけれど

トコトシヤレ トシヤレナ

薩長土肥の 薩長土肥の 先手に手向いする故に

トコトヤレ トンヤレナ

雨の降るよな 雨の降るよな 鉄砲の玉の来る中に

トコトヤレ トンヤレナ

命惜しまず魁するのも皆御主の為故じや

トコトヤレ トンヤレナ

島津響を先頭に太鼓を響かせて、馬上の「宮さん」——東征大総督有栖川宮熾仁親王を指すともいわれる——率いる軍勢は、西から京を通過して東へ、そして吾妻へ。歌は瓦版となつて各地へ伝えられているが、<sup>2</sup>流行の原因は瓦版というより、箱根を越える兵士の移動それ自体だろう。歌詞が伝えているのは、東進する軍勢の具体的な姿である。しかも、敵味方とも、ある同じ単位に所属していることが示唆され、道程は、列島のうち本州、四国、九州を含む領域に重なつている。先の平家にみられた勝者と敗者のコントラストよりも、あるひとつの単位の出現が歌に込められているようだ。それを「日本」と呼びうることに、多くの読者が同意するだろう。

しかし、真に注目すべきはこの点ではないと思われる。一連の文章にリズムを与え歌に変える囃子詞ではないだろうか。「トコトヤレ」——この音声の連なりは、芸妓の足拍子の音からきたとされ、前近代から存在する無意味な擬音にすぎない。だが、この歌の大流行の結果、自由民権運動時代以降には、音であることをやめ、意味を有する《語》に変化していく——すなわち、「徹底的にやれ」で

<sup>3</sup>ある。だが、一般的に、ある多様な音声が特定の意味をもち、話者と聞く者のあいだの默契を通じて《語》となつたときには、すでに出来事は終わつている。誰もがこの言葉の意味を知つているということが示すのは、革命がさなかでなく終わりから眺められるということであり、先取りするなら、すでに閉じられた国民と国家とがあらわれているということである。意味が生まれた段階で、学者が咽から手が出るほど欲しがつている、言葉と出来事とが重なりあう過程は喪失している。だから、あえて結果にこだわらず、意味を有する手前に留まらねばならない。それは無意味であつても、たんなる音ではなかつた。維新を伝えることなく伝える、純粹な出来事それ自体でもあるような、特異な音声の連なり——《歌》だつた。こうした《歌》にこそ、革命の秘密、異なる時間と時間とをつなぐ画期的出来事の秘密がある。音声と語のあいだの移行としての《歌》という概念は、われわれの目指す針路のよき道標となるにちがいない。ヘーゲルら哲学者によつて、より身体的といわれる空間と空間とをつないでいるのが《道》だとすれば、より精神的といわれる時間と時間をつないでいるのは《歌》である。歴史の画期を穿つのは《道》と《歌》なのであり、したがつて、革命的歴史の時空間は次のように表現できる。すなわち、《道の空間》と、《歌の時間》である。

## 第二節 国家の場所

近代国民国家は「想像の共同体」ではない。それは、もつと別の仕方存在している。思うに、ベネディクト・アンダーソンのこの

★<sup>4</sup> 定義は、賛同する者のみならず、反対する者にさえ、致命的な誤謬をもたらしてきた。本稿の目的は、「想像の共同体」という議論そのものを可能にしつつ国民国家を隠蔽しているある権力の様態をあきらかにし、国民国家に独自の存在論を明証することである。そのためには、これまでとはまったく異なる、哲学的・歴史的なアプローチが必要になる。

一般的には、近代的な意味での「想像」の語はカント哲学に起因する。悟性に端を発し、悟性的なものと感性的なものをつなぐ力である想像力は、いささかあやふやな力である分、両者を分かち隔たりでもあり、感性的・物理的なものについての間遠さを意味している。つまり「想像」としての国家は、感性的なものの側に存在する物理的対象ではない。どちらかといえば、表象を認識する悟性の側に存在している。したがって、実証主義的アプローチによつて接近可能な対象とはいえない。構造主義的なアプローチこそ、国家に接近する正しい道程である。たとえば近代のすべての国家が掲げる国旗は、それ自体は国家でもなんでもない。国民を代表する政治家の身体もまた国家でもなんでもない。国家は、ある記号シグナルを特定の国家の象徴として共有し、あるいは代表する者とされる者という関係自体を可能にする、超越論的な「場」である。すなわち国家は、想像の産物、人為的な文化表象の総体である。

これに反対する者は、国家の唯物論的な基礎に目を向ける。個々の国民身体、とりわけテロリズム（白色テロも含め）の対象となりうるような権力者あるいは来たるべき権力者の諸身体、法を可能に

する暴力、とりわけ軍事力、あるいはそれを独占する特定の集団（階級）、そういった、感性的で自然に属するものこそが、国家という存在の本質であり、国家はそれ自身の表象を誇示している。すくなくとも、かつてのマルクス主義がそうだったように、法やイデオロギーではなく、それを可能にする生産諸関係の方に相対的な優位がある。国家は、ある特定のイデオロギーにもとづいて一挙に、かつ人為的につくられたものというよりは、自然の因果が長い時間をかけて可能にするのであり、統計学あるいは実証主義的なアプローチによつても接近可能なものである。だから国家は、文化の条件であるかもしれないが、文化それ自体とは別のものであり、先に述べた文化表象的な議論はあまりに観念論的なものにみえる。

日本での前者の代表は柄谷行人や大澤真幸らであり、後者の代表は数多くの古くからのマルクス主義者や実証主義者、あるいは比較的新しくはアンダーソンを批判した萱野稔人らである。しかし、これら国民国家論の両極端な相違は、それ自体、水準が高いとは言いがたい、観念論・経験論という紋切り型の二分法に収まってしまうものである。そのぶん、理解は容易だが、現実の国家を指示している可能性は低い。というのは、まちがっているからではない。本来であれば正反対の結論をもたらすはずのアプローチであるにもかかわらず、どちらもそれなりに正しく見えるからである。すなわち、ここで予測されるのは、部分的には的確だが、全体としては誤謬に陥っている、そうした事態である。国家は、想像的なものとはいえないが、さりとて、唯物論的な規定に収まるともいえない。否、想像的

なものに見えると同時に、唯物論的なものにも見える。こうした二分法のうちに軟体動物的に住まい、あるいは両者をすり抜けていく術を、国家自身が心得ているかのようである。

しかしだからといって、認知り顔で二分法を弁証法的にこね合わせてひとつにすることで、問題が解決するわけではない。そうした弁証法は、国家の軟体動物的作動の模倣的追随におそらく等しいのであつて、いくらそのことを批判的に指摘したとしても、そこに留まつているかぎりには、国民国家の新しい概念規定というより、その盲目的な再生産にすぎない。むしろ重要なことは、こうした軟体動物性に驚くことである。いかなる時空間においても、そうした怪物的はたらきは可能になっているのか。哲学的にはまつたく異なる、共存したい立場でありながら、両者を同時に可能にする時空間。そこは、人為と自然との区別がつけられないような、独自の時空間であるべきはずである。

## 第一章 時空と道

### 第一節 二つの時空

時空間とはどのようなものだろうか。遊戯を許された学童たちのための校庭のように、われわれが活動するに当たり、活動それ自体を可能にする先験的な場と考えるべきだろうか。それとも、料理のなくなつたあとの皿のうえの空虚のように、行為の結果／効果として現われるものと考えるべきだろうか。あるいは、芽吹き、色づき、

やがて枯れ落ちまた芽吹く、その繰り返しを淡々と数えていく曆に時の本質を見るべきだろうか。それとも、蠟燭に灯された炎のように、定められた始まりと終わりとのあいだの持続に時の本質を見るべきだろうか。いずれにしても、それは、歴史において、ひとの行為についてのある種の制約や基準として、感じられてきたものである。たとえば自然なものとしては、目的地までの気の遠くなる距離、海や山といった地形の起伏、一定の周期をもつて変わる日の長さ、気候、季節、星の運行、「徑百餘歩」<sup>★10</sup>といった表現にみられる人間の身体の大きさ、あるいは生命の息吹を幾度かの反復ののち停止させる寿命。人為的なものとしては、国境、関所、城壁、監獄、家や血統、終末論（末法思想）、労働時間、あるいは等速度で飽くことなく回転しつづける水車や風車、重なつては離れていく時計の三つの針。フェルナン・ブローデルは、山について、こんな風にいっていた。

山が山であるというのは、言い換えれば障害ということだ。また、同時に、避難所、つまり自由な人間のための国である。なぜなら、文明が（社会、政治的次元であれ、貨幣経済の次元であれ）拘束や隷属を強制するものすべてが、山では人間を圧迫することはないからである。<sup>★11</sup>

海について。

海、それも十六世紀の広大な海に対して、人間が占有してい

るのはいくつかの沿岸の細長い地帯、路線、ごく小さな拠点  
 ……である。膨大な空間のうち海はサハラ砂漠と同じくらい  
 人が住んでいない。海は海岸沿いしか活気がない。航海とは、  
 河川運送の初期と同じように、ほぼ沿岸を進むことであり、「岩  
 から岩へ行く蟹のように進むこと」であり、「岬から島へ、ま  
 た島から岬へ」行くことである。<sup>★12</sup>

そして平野。

平野と言つてごらんなさい。するとこだまは、豊穡、容易、  
 豊かき、甘美な暮らしと答える。…こだまは、呼び掛けに耳  
 を傾ける者を欺く可能性に満ちている。…人間は、高地、小  
 さな丘、河川の段丘、山の周辺部をたちまち占領してしまつた。  
 そうした場所に、人間は人口の多い大きな村や、時には町を  
 つくつた。反対に、水の脅威に脅かされている盆地の中央に  
 は、住居がまばらにあるのがしばしば通例であつた。…長い  
 間、…平野は不完全な、また一時的なかつたでしか人間には  
 とらえられなかつた。…見掛けのパラドックスから、大きな  
 平野はしばしば陰気さと悲歎のイメージを提供していたのだ。  
 ……半ば砂漠…水牛の群れの住処…驚くべき湿地帯…泥だらけ  
 の森…熱病の土地…沼地…<sup>★13</sup>

ブローデルのこうした表現は、すべて、われわれ近代人の思い込

みに反するものとして強調されている。われわれにはもつぱら障  
 碍にみえる山も、かえつて前近代のひとつには自由を授けることが  
 ある。平面にみえる海にも、実際にそこで暮らす前近代のひとつと  
 はさまざまな起伏を読み取っている。またとりわけ特徴的な平野は、  
 近代人の想定を裏切る「陰気さと悲歎」に満ちている。それは日本  
 も同じである。起伏に富んだ、無数の盆地を形成する山、入り組ん  
 だ海岸線と岬、群島、狭い海盆からなる海とがあり、そしてわずか  
 ではあるが平野もある。ブローデルがヨーロッパについて指摘した  
 のと同じことが、日本の平野についてもいえる。「武蔵国言。管内  
 曠遠。行路多難。飢病者衆」。<sup>★14</sup>たとえば武蔵野は、長いあいだ、行  
 く手の針路を見失わせる、砂漠に似た原野だつた。たとえば古代の  
 天皇は、水難の多い大和盆地の中央を避け、周縁部の山沿いを転々  
 と移住していた。<sup>★15</sup>平野の狭さを考えれば、もつぱら平野を選んで行  
 なわれる農耕だけを日本の産業の特徴とみなすわけにはいかない。  
 それに反して、「最良の土地」と「一番低くて平坦な土地」をや  
 や無批判に結びつけているオギユスタン・ベルクは、「水田」はま  
 さに、二〇〇〇年の歴史が作ってきた日本性の印そのものである。  
 それは、日本という空間を一挙に特徴づける<sup>★16</sup>といっていた。つま  
 り、彼によれば、「日本性」のほとんど全領域を占めているのは「水  
 田」である。だが、彼は一方で、「おく」に向かつて進む「日本の  
 文化——たとえば寝殿造りにみられるような——の特異性に目を向  
 けていた」。<sup>★17</sup>奥行き——別のいい方をすればハレとケ——を生み出す  
 のは、視線を遮るものすくない水田地帯よりも、山や谷、盆地、

入り組んだ海岸線、さもなければ「草木茂盛、行不見前人」<sup>★18</sup> ような

平野がつくる、起伏に富んだ空間のものはあきらかである。だから、ブローデルの平野についての指摘、あるいは「水田」でなく「おく」について指摘するベルクが正しいとすれば、彼らとは逆の問いかけも可能である。すなわち、近代人の平野に対する親しみは、いつた、どこからやってきたのか。網野善彦ならば、近代人の平野への親しみを近代以来の農本主義的イデオロギーの産物として説明するかもしれない。<sup>★19</sup> 柳田国男なら、「深く弱者たる山民に同情を表し」つつ、「粟食人種、焼畑人種を馬鹿にする」「米食人種、水田人種の優勝」を指摘するだろう。<sup>★20</sup> だが、網野にしたがえば、「水田人種」がほんとうに「優勝」したかはわからないし、また網野に反して、近代人の平野のイメージが稲作の内部に留まるという保証もない。

イデオロギーとしての平野について、別の観点を提示しよう。有名な平行線公準に依拠したユークリッド空間は、しばしば $x$ 、 $y$ 、 $z$ を付与されたいくつかの軸の直交するデカルト座標系で表象される、すべての方向に無限に広がる均質な空間である。近代科学の王道、ニュートン力学は、この空間（絶対空間）に依存する。すなわちここでは、あらゆる物体に等しく重力が伝達される。したがって、物体の位置や意志によって不均一に重力がかかる（疲れたり、楽だったりする……）山や海は、当然ながら、この空間には存在しない。また、第一公準によれば、この空間では、二点を結ぶ直線を引くことができる。したがって、目的地にたどりつくため迂回を要求する山や海は、やはり存在していない。ここではいつも、道は直線なのだ。

いうまでもなく、平東京や平安京といった条里制（条坊制）にもとづく都市計画や、あるいは田園風景にみられる一部の整然とした地割区画は、ユークリッド空間に親和性が高い。これらはたしかに、近代人が思い描く、理想化された日本の平野の歴史的風景ではある——実際には、日本全域に条里制が普及していたとはとうてい言い難い——のだが、同じように、近代人が平野に付与しているイメージでもあると思われる。だとするならば、畢竟、次のような問いが許されるのではないか。すなわち、近代的平野とは、ユークリッド空間の、隠喩ではないだろうか。あるいは、ユークリッド空間こそ、近代的平野の隠喩なのだろうか。いずれにしても、近代合理主義の核心たる二物体間の一対一対応を規制しているユークリッド空間が、何らかの形で、近代人の平野のイメージに紛れ込んだのではないだろうか。換言するに、近代科学Ⅱ知が、いつのまにか、現実の歴史やわれわれの精神に介入していたということである。

## 第二節 道を歩くこと

日本が列島社会であることを強調していたのは、網野善彦である。<sup>★21</sup> 彼がそこでいいたかったのは、日本は、たとえば天皇家や侍といった単一の権力階級によってのみ表象されるような、単調な社会ではなかったということである。彼によれば、海と山がつくる多様な地理条件にあわせて、日本はいくつかの異なる政治空間に分割可能である、ということだった。たとえば蝦夷地と呼ばれて征服の対象だった東北はいうまでもなく、平将門の乱を生んだ坂東、藤原純友

の乱を生み、玄界灘、東シナ海をその活動域とした海賊の跋扈する西国、あるいは墨俣を境に、東には將軍が、西には天皇がい質的に異なる空間が生まれ、また戦国時代には地勢ごとにさまざまな小国家が分立していた。周辺に視界をひろげれば、たしかに彼の指摘するとおり、日本は、ベーリング海、オホーツク海、日本海、東シナ海、南シナ海という五つの内海を大陸とのあいだに形成する役割を果たしつつ、その内部には瀬戸内海をも抱える独特の形状からなっている。こうした広域日本の複雑な地理条件は、一種の「自然国境」をなし、前近代の日本社会を、それぞれちがった意味をもつ、それひとつでも国家規模の空間に細分化していただろう。

こうした事例から、網野は「日本民族は単一民族」という見方を近代のイデオロギーであると端的に否定していた。それは、前世紀末以来の歴史学や社会学の潮流、たとえば「単一民族」説を近代がねつ造した「神話」とみなす、小熊英二のナショナリズム批判とも親近性の高いものである。<sup>22</sup>だが、単一性を、神話Ⅱ虚構と呼ぶ意見を鶴呑みにできるだろうか。というのは、たしかに諸々の空間が切片的に生じているとはいえ、それぞれが海路と陸路とによって接続され、とりわけ五つの内海のちょうど中心に位置する列島を取り巻くように、その交流・交易が生み出されていたことはまちがいないからである。単一性をすべて近代の産物とみなす、イデオロギー暴露を政治的課題とする見解の内部に留まるかぎり、ひるがえって前近代の日本はばらばらに分割されていた、ということを追想させるだけの、相互の連関を欠いた底の浅い議論を招きかねない。あの網

野が、ここでの議論をその水準に留めたことは、おそらく、現代日本で学問することの困難を物語っているのだろう。民族的単一性をイデオロギーとみなすアンダーソンや網野らの議論にしても、マイノリティを排除・隠蔽する暴力／権力装置の存在を指摘するマルクス主義者や萱野、小熊らの議論にしても、その哲学的根底が大いに異なるにもかかわらず、彼らがたいして対立しないのは、導かれる結論——前近代日本の分裂——が変わらないからである。だが、彼らとて同意してくるだろうが、前近代の日本がすこしの統一性も持ち合わせていなかったと考えることは、あきらかに可能性の低い極論である。<sup>23</sup>単一性を複数性に置き換えるのではなく、また近代と前近代とを単純に対立させるのではなく、複数性の背後にある単一性を、あるいは分裂を繰り返しながら別の統一性を形成しては消える、分裂／統合の連続変化を、われわれは追究すべきではないか。<sup>24</sup>

元来、民族という観念自体、厳格な境界をもたないものである。あくまで統制的に用いられるべきものであり、統計的なものではありえない。民族観念の構成的厳密化（Ⅱ民族浄化）はたしかに忌むべき過ちである。だが、その不備の多さに目をつむり、あえてこの観念を前提に、単一か複数かを歴史的・現実的な意味で問題にするのなら、この観念の現実的対象は中心―周縁図式も明確な境界もない、フアジー集合としかいえないものである。よって、朝鮮半島を含む大陸あるいは南方からの渡来人（倭民族、南島民族）および先住のアイヌ民族間の混淆の連続変化のうちに、ひとつの、クレオール的、日本民族を見いだすことに、特段の問題があるわけではない。



もし、複雑な重層性を可能にする地理条件に依じて、複数の国家や「民族」が生まれていたことを前提にしてよいなら、逆に、権力の正統性を保証しようとする、排他的なひとつの、したがって虚構にもとづく抽象的な神話イデオロギーは、かえって乱立が避けられなかったはずである。天皇家や藤原氏、將軍、大名、あるいは神道や仏教、儒教、国学……。虚構の神話と国家とを結びつけ、権力を保証する抽象的イデオロギーとして非難する社会学者の見方に反して、レヴィ・ストロースは、神話の読解は、ますます国家のような集団の重層性や複数性を露わにすると指摘していた。いかに神話が権力者の意識のうちで都合よく作り変えられていたとしても、よく読めば、彼らの利己性を裏切る無意識の多産さに満ちているものだ。近代知識人の使用する「神話」の語は、その大半が、事実にもとづく歴史に对立する、より低い価値しかもたない虚構を意味する隠喩だが、忠実な神話の読解がもたらすのは、嘘というよりは吹きこぼれるような複数性であり、逆に歴史のほうがずつと単調で単数的なのである。だから、さまざまな神話の割拠する、したがって複数の空間で構成される日本に、かろうじてある種の統一をもたらしていたものがあるとするれば、神話ではなくて、《道》をつうじておこなわれる、具体的なひとつとの交流のほうである。すなわち、別々の諸空間に多重に所属し、おのれを異分 *Different* とする《移動する民》——柳田国男のいう、「移動学校」としての「漂泊者」——<sup>★25</sup> によつてこそ、比喩的にいえば、さまざま、不平等を繰り返しながら、日本という単位はそのつど形成されえたと考えるべきかもしれない。単一

の中心がイデオロギーとして複数の空間の上位に君臨していたのではなく、《道》が複数の空間をつないでひとつにしていたと考えてもよかつたのである。

《道》とはなにか——《道》は、たえず、点と点、すなわち出発地と目的地とのあいだに広がっている。道、出発地、目的地は、旅や彷徨、亡命を引き金に、一挙に形成されるのだ。もちろん、どこにも行き当たらない、袋小路は存在する。かつて阮籍は、「心のおもむくままに独り車を走らせ、脇道は通らず、車が行きどまりになると、慟哭して引きあげた」という<sup>★26</sup>が、老荘に通じた詩人がむせび泣くほどに、袋小路はある意味では不自然なもの、人為的なものである。たしかに、《道》の存在がひとつたび前提となるや、これを人為的に閉ざすことも可能になる。たとえば江戸時代、東海道は距離にして一二六里六丁一間（約四九二キロメートル）、そのあいだに関所が二カ所（箱根・新居）、川止が四カ所（酒匂川・興津川・安倍川・大井川）あり、一三五里二丁（約五三四キロメートル）の中山道には関所が三カ所（碓氷・福島・贄川）あった。五三、あるいは六九カ所の宿のいくつかを經由しながら、ひとは、なんらかの形で袋小路を突き抜けなければならなかつた。こうした人為的で自由な道の開閉、ひとつとの交通の適度な滞留こそ、領土と呼ばれる面的なもの起源であろう。とはいえ、そうした袋小路を迂回する三叉路もまたすぐに作られる。関所を通過する際、とりわけ困難をきわめたのは女だが、姫街道とよばれた脇道には、関所を迂回する別のルートが作られてもいたし、今日にいたるまで、東京における三叉路の

異様な多さは、特筆すべきものがある。<sup>★27</sup> 条里制の典型である京都でさえ、化野にいたる帷子辻、鳥辺野にいたる五条別れ、終野別れなど、周囲にも内部にも、三叉路は隠されている。三叉路の奇妙さは、諸々の最短距離の均衡である交差点（四つ辻）の連続、いわば条里的な道を前提にすれば、いつそう際立つだろう。かつてドウルーズとガタリは、条里空間と対立する平滑空間の概念を提示していた。<sup>★28</sup> こうした両極の概念を対比することは、哲学的にはきわめて興味深い。だが、極端な概念を考慮することで生じる還流という不利益もある。われわれの場合には、三叉路を考えるだけで十分である。分かれ道であり抜け道であり接続路でもある、そこを通るひとを不安にさせる三叉路は、面的な考え、すなわち領土という思考をたえず裏切る、女あるいは漂泊者の描く線である。

しかし、《道》を閉ざすのは、かならずしも人為的なものとばかりはいえない。むしろ多くの場合、《道》は天災によって閉ざされたはずである。このときにはかえって、人為的な領土の思考は消え失せ、領域間の接続という線的な主題が取って代わるだろう。そうした意味での《道》は、出発地から目的地へといたる途上の、つまりそれらよりは価値の劣る、たんなるプロセスではなかった。目的地にたどりつくことにもまして、ひとつの事件でありえた。別れ道に出くわせば、かならずひとは選択を迫られる。引き返すことなく途上で選ばなかった道に合流できる、つまり選択の不安を薄めてくれる、条里的な道にはありえなかつた事態が生じる。一方は京へ、他方は化野へ——《道》は、そんな事件を生み出す力をもっている。

鎌田正純は、実質的には薩摩藩家老として、安政三年（一八五六年）より、江戸詰、若年寄・御家老名諸事取扱を勤めた人物である。安政五年（一八五八年）七月十三日、鎌田は藩主島津斉彬より帰国命令を受けている。表向きには守衛方交代だが、六月十九日の日米修好通商条約締結、七月四日の將軍家定死去、同五日の尾州徳川慶恕、水府徳川斉昭、越前福井侯松平慶永らの謹慎命令（安政の大獄）の直後であり、政局打開にむけ出兵を企図していた斉彬に直接、江戸の「事情」を伝えるための緊急の内命だった。

鎌田の日記によれば、七日後を出立と決め、予定通り二十一日「朝六時半早目」、東海道ではなく中山道を選んで屋敷を出ている。同日には大宮、翌日には深谷に到着、翌二十三日には深谷を出て順調に本庄を通過したものの、新町の手前で折からの雨天のため橋が落ち、「川止め」となった一行は、ふたたび本庄に引き返すことになる。二十五日、依然として川止めのつづくなか、行列供回りを本庄に残して船で先行、途中「上下無差別一宿」しつつ、二十六日には安中に到着するも、翌日にはふたたび川止めとなり、同宿に四晩の滞在を余儀なくされている。滞在中、同じ薩摩藩の儒学者で書家の太山呉一郎と同宿となり、書を所望し酒を伴にするなどして時を待ちながら、八月二日には行列供回りを伴って松井田に到着。しかし、今度は松井田より十里先の横川村で道が崩落大破、「通路留」となった一行は、十日の出立までそこで過ごすことになる。

五日、鎌田は「上様御発駕不被為在内精々着之賦候得共、天災力二不及」、大坂まで飛脚を飛ばして一行の状況を伝えている。また

八日には次のような歌を詠んだ。

中山道上州にて川支、八日道支八日の滞り二逢、公の急ぎ

ある身にしあれと、天災力二及ハねハ災せん

憂せきハ吾身を玉に成すの理りとやと思ひ侍りて

愚なる身をさへ玉に磨けとや

かく天地の戒しむるらむ

事と理りとハ二ツなき訳を

理りの外にありてふ道もなし

ミちより更に又事もなし<sup>★30</sup>

理の外に道なく、また道の外に事はない。理も事も、道のうちにある。行路の後半は前半とは打つて変わつて速度を増した。ようやく十日に「通路留」は解消、松井田を出て信州追分に到着。翌十一日、塩名田で出水により三たび川止めとなるも一晩で明け、十二日には笠取山から浅間山を眺めつつ和田、翌十三日洗馬、十四日上松、十五日には妻籠、馬籠を通過して落合に着いた。ここで近衛忠熙より内命を受けて、十六日には行列を残して駕籠にて出立、「極忍用達之名目二面」夜入四ツ前に太田に到着、十七日暁八ツには太田を出て番場、十八日には守山、十九日には伏見に着いた。しかし、彼はそこで、思わぬ知らせを聞くことになった。

然処即より市來正之丞参

太守様御事、去月十六日被遊

御逝去候段承り、誠ニ当惑奉絶言語、悲歎無限候……<sup>★31</sup>

すなわち、鎌田が内命を受けた三日後、江戸を出る五日前に、すでに当主斉彬は死んでいたのである。鎌田が伏見で清水寺先住月照より受け取った内命とは、安政の大獄連座を予期する近衛忠熙からの薩摩藩に宛てた警衛依頼だった。だが、彼は薩摩帰国後一日も出仕できずに、十二月八日に病死している。いずれにしても、男性で半月弱といわれる中山道の通過に、その倍のひと月かかったわけである。当時、上州の通行に難渋をきわめていたことは、馬籠の庄屋大脇兵右衛門信興の『年内諸事日記帳』（通称大黒屋日記）に次のように記されていたことからわかる。「往還継立混雑 八月十五日——天キ、暮合雨 上州路川留メ損所につき、二十日程も往還通行なかりしところ、川明につき、夥敷家中御通行。薩摩御家老、并に尾州御家中御通行につき、往還継立難渋、賑々敷事に候落合にて見物」<sup>★32</sup>。薩摩より内命が江戸へ下り、そして江戸から薩摩へ鎌田が帰還するうちに、歴史は一挙に動いていた。かつて、ブローデルはこんな指摘をしていた。

カルヴァンは、返事を出すのが遅れてしまったデル・ヴィーコに手紙を送るときに、次のように告白していた。「……私の手紙がどれほど長い間途中にあるかと考えると、義務を果たすことに何度もどれほどおぼろげにわかつたかわかりません。」…政

治家や大使にはとかく壮大な考えがあると我々は考えがちだが、彼らが気にかけているのは、たいていは郵便物の到着ないし遅れである。<sup>★33</sup>

ブローデルが指摘するのは、現代社会に生きる歴史学者が忘れがちな、十六世紀のひとびとにとつての地中海世界の広大さである。フェリペ二世個人の判断の遅れよりも、彼の判断を広い国家の周縁部にいる末端の部下に行き渡らせるのかかる時間のほうを、学者は考慮しなければならぬかもしれないのである。それと同じことを、ずっと狭い日本の空間においても考えなければならぬことを、鎌田の困難な足取りは示している。だが、ブローデルの指摘以上に、われわれには注意すべき点がある。

ひとつは、江戸の「事情」を知らせるために、ブローデルのいう「郵便」、すなわち飛脚を用いなかった、という点である。当時、早飛脚であれば、書状一通なら江戸から京まで一週間で配達できた。しかし、日記を読み解くかぎり、遅れを気にする鎌田に、飛脚で「事情」を伝えるという選択肢はなかった。あくまで遅参の理由のみを書状に記すにとどめている。<sup>★34</sup>要するに斉彬は、江戸、京、薩摩という異質な諸空間を横断しようとする、鎌田の口から直接話される言葉や耳に入れることを求めている、ということである。たとえば、薩英戦争の際、薩摩藩が残した英国軍の知見は「薩州産之者」、「長州人」、「高岡町徳助」、「薩州高岡郷士日高十郎」、「水俣御惣庄屋高橋一之充」、絵師脇田森左衛門（画名晴雲）らによる風説留から総

巻物にいたるまで、相当な数にのぼる。<sup>★35</sup> それらにおいて重視されているのは、第三者性ではなくて、誰が話しているか、誰が記したか、である。そうした主観性が一律に知見の信頼性を損ねるという観点は、当時のひとびとには存在していない。

今日、「情報」に求められているのは、客観性である。すなわち、知見が伝える現実の対象にかかわりのない第三者による記述こそ、信頼のおける「データ」であり、「情報」である——たとえば、近代の戦争の多くの場面において、戦地の報道は兵士ではなく第三者である新聞記者が担当するように。だが、前近代のひとびとが、報道的客観性、裏を返せば主観性（主体）の抹消された、つまり点の否定としての平面という特別な準拠面を、現代人と同じように構築していたとみなすのは早計である。むしろ、彼が兵士であり、絵師であり、あるいは家老であるがゆえに知りうるような、特権的な知見こそ求められていたと考えるほうが、たんに彼らが事実性を高めるといふ点で現代人より劣った観念しかもっていないと考えるより、こうした事例を理解する場合にははるかに自然で有益である。主観と結びつかない純粋な「データ」なるものはありえず、ときに身分という形で可視的に表象される、配置上さまざまな高低差をもった個性的な点が別の点と結びつくことにおいてしか、この時期の知見はありえない。異質な諸空間を横断する、すなわち途上を知り道を知るものだけが、もちうる視座。われわれは、こうした知見を、情報と区別して、鎌田の言葉を借りて「事情」と呼ぶことにする。情報の概念が、できるだけ多くの人間に等しく共有されること

を指すとするれば、事情は、個人的な関心に応じて奥深いもの、幅広いものであること、いわば事情通であることを目指すだろう。

もうひとつは、起伏ある時空間の周囲に広がりがつつあった、別種の時空間である。鎌田が藩主の死を知った安政五年八月十九日といえ、グレゴリオ暦では一八五八年九月二十五日にあたる。三週間後の十月十六日には、上海の週刊紙ノース・チャイナ・ヘラルドのコレラ流行を伝える記事中に、「最も知的で頭脳明晰な日本人のひとり、薩摩藩主はこの病で先月死亡した」とある。<sup>★36</sup>この時期、上海発の情報は、およそ四十日かけて、蒸気船でインドを経由してスエズに達したあと、電信でロンドンまで渡る。鎌田が斉彬死去の事情を知るのに三十二日の時間が必要だったとすれば、上海からロンドンにいたる情報の伝達はそれとほとんど変わらない。これら二つの空間は、まったく別種のものである。一方において、伝達速度と知見の信頼性とが反比例していた、いかえれば時間と空間とが密接に重なり合っていたとすれば、他方においては、現代人ならば誰でも理解しているとおり、速度と信頼性とは、まったく別の次元の問題である。曲がりくねっていて緩急にも満ちた鎌田の足取りと、ロシアで一定の速度ですむ蒸気船―電信網の描く線とを対比してみよう。奇しくも、日本にベリ―より伝えられた電信機テレグラフに多大な関心を示し、国内初の実験に成功したのは斉彬だった。もし薩摩と江戸のあいだに電信網があれば、安政の大獄のはじまる前に、薩摩は出兵していたかもしれないと考える誘惑を禁じるのはむずかしい。近代のはじまりにあったのは、そんな異質な時空間の共存なのである。

## 第二章 都市か国家か―近代都市の考古学

けつして海や山だけが、人間の障碍なのではない。ときには平野でさえ、障碍となる。たとえば古代ローマ市民は、初期には平野には住まず、七つの丘に居住した。平野、すなわち湿地帯に住んだのは、あとからやってきた移民プロレタリアだけである。障碍は自然国境をなし、ひとを空間の片隅に閉じ込めてしまう。外から遮られ、内から定められた空間が、国家をなす。つまり盆地は、それだけ国家にとつて都合がよかったのだ（海盆にも同じことがいえる）。だが同時に、盆地は、ひとびとに道の概念を発明させるのではなからうか。多くの場合、盆地を抜ける河は、別の場所へとつながり、けつして完全に閉ざされてはいないものである。盆地から盆地へ、海盆から海盆へ。長安は、帝国の概念の歴史上の起点（首都）であると同時に、東西交通の空間的な起点ノ都市でもあった。同じように大和は、日本の中心ノ帝都であると同時に、世界史的交流の終着点／始発点でもあった。かつてルイス・マンフォードは、多くの都市に付随する城壁を、都市を可能にする外殻とみて、たんに外敵から身を守る以上に、その内側で生じる「凝集」に都市の起源をみていたが、<sup>★38</sup>盆地も同じ役割を果たしうる。盆地の概念は、歴史上きわめて両義的で、示唆に富んだものである。

そこでもう一度、空間について考えてみよう。それは、ひとの活動にともなつて現れる空虚だろうか。それとも、ひとの活動のため

前もつて必要な場だろうか。空間にまつわる、この二つの哲学的範疇のいずれが正しいか、答えは簡単にはでない。だが歴史的には、次のことは確実にいえる。前者は都市的な空間に、後者は国家的な空間に対応している。都市や国家の発生的な起源について、さまざまな議論が蓄積されてきたが、無数の定義が生む無用の混乱を避ける意味でも、都市と国家の概念的な区別を十分につけておく必要がある。すなわち、実態の多様性に目をつむってモデルとしていえば、都市は、いくつかの街道の結節点で行なわれる、ひとびとの交流の結果として形成される。いくつかが国家の概念との混同がみられるものの、市場に都市の起源をみようとしたマックス・ヴェーバーの議論は、こうした空間概念にもとづいていてと考えてよい。それに対して国家は、あらかじめ定められた中心・周縁図式の内部にひとびとの交流を組み込んでいるのであり、交流に先立って、それを可能にすべく、つねに「すでに存在している」。

したがって、次の点でも都市と国家とを区別可能である。ネットワークと中心・周縁図式である。

都市は、中心をもたないネットワーク上の複数の特異点、すなわちひとびとの移動の重なるところである。こうした交通を前提に形成される以上、都市は、たえず、《諸》都市である。この点は、商業にその起源を見出していたヴェーバー、堺など文字通り国境に都市が形成されるといった網野も含め、都市研究がみおとしがちな点だから、とくに強調しておかねばならない。あえて中心を定めるなら、都市それ自体ではなく道のほうである。折口信夫は古代の境界とは

線ではなく、とりわけ「坂」(境)をなすような道路上の点だと断言していたが、都市のネットワークから考えれば理解しやすい。

だから、都市を定義するとき、記念碑的建造物を中心にするなら、たいていは徒勞に終わる。墳墓、神社、寺院、あるいは天守、それらはかならずしも都市の中心にはないからである。むしろそのように定義しようとすること自体が、都市を、不当に国家のほうに近づけてしまう。歴史的蓄積を象徴する建造物は、郊外に追いやられているのであって、都市の中心で催される祭典の多くは、ヨーロッパの場合には、ひとびとの交流の結果として生まれた空虚な広場<sup>アゴラ</sup>で、日本の場合には、街道で行なわれる。こうして、都市を単独で考えたり、可視的な都市の建造物ばかりに注目してしまうと、都市の概念からかえって離れてしまう。むしろ、都市とは、たとえば京の七口にみられるように、街道を通じて行なわれる交流の入口ないし出口であって、あるいは同じことだが流れの中継点ないし変換器である。こうして都市は必然的に、水平のネットワークを形成する。

その一方の国家はといえば、かならず中心をもっている。すなわち特権的な都市であるところの首都をもつ。そして中心があるからには周縁がある。すなわち農村である。玉座(=座標軸の原点)をもつた中心・周縁図式は、中心をもたないネットワークを形作る都市の概念とは関係していない。都市の興味はあくまで、市場に提供される商品としての生産物にあつて、後背地がいかなる姿をしているかにはまるで興味をもたない。後背地に関心をもち、それを農村として、つまり固定した農民の集落として見出すのは国家なのである。<sup>★41</sup>

また、都市の宗教起源説は、フュステル・ド・クラランジュ以来の伝統をもつが、<sup>★42</sup>この場合でも、多種多様な神々が並立する多神教的な要素を色濃くもつ都市的な宗教と、神々を統括する超越的な神を認める国家的な宗教とを区別しないならば、ほとんど意味をなさなくなる。というのも、歴史的にいつて、都市と国家とは、集団形成とその維持のために、異なる政治システムを発達させることになったからである。すなわち、都市における公職者制度と、国家における官僚制度である。

都市において集団（むろん、この語は都市の語源である）統治にあたるのは、推薦や投票、くじ引きや輪番制にもつき任期を限つて選出される、アルコン（アテナイ）やコンスル（ローマ）などの公職者である。集住といつても、交流が前提である以上、その

場に利用価値がなくなれば、あるいは個人が集団に害なすとみなされれば、各々別の場所へ移動あるいは追放される可能性にたえず晒されているのが都市である（国家における移住や刑刑が、国家の内部に取まつてしまうのとは原理的に異なる）。任期付であるがゆえに、共同体統治のための専門家集団は形成されえず（原則として無給の公職者は、ローマの大カトラーがそうだったように、農地経営や商売などにかかわる本業をもつ）、また多神教的な要素を色濃く残しつつ、議会や多頭政治が展開されることになる。たとえばローマの元老院やヴェネツィアの大評議会、あるいはヨーロッパ各地にみられた（十二世紀にはウニヴェルシタスという共通名をもった）ギルド、堺や博多にみられた会合衆がその典型である。都市を官僚制

度の発達から定義しようとする議論もあるが、理念的には、都市を国家に吸収された姿で把握するに等しく、実態的にも、アテナイや共和政ローマ、ヴェネツィアや堺などの実情にそぐわない（日本の古代ローマ史研究は、コンスル——ラテン語の原義は「ともに歩く者」である——を執政官と翻訳する伝統を有しているが、この役職が官僚でないのはいうまでもない<sup>★43</sup>）。分業が歴史的發展の成果ではなく、歴史を営む人間には元来備わっている生来のものとみなすなら、原分業にもとづく生産／獲得物の差異を、マーケットを可能にする商品／言語として見出すのが都市であり、原分業そのものを官僚制として取り込むのが国家であると考えたほうがいい。

国家の発達させた政治制度は、君主を頂点とする官僚制度である。一神教的な唯一の王を頭ないし心臓として、専門家集団である官僚はその手足を担う。集団成員は、多くの場合、農業に適した形で面的に分散させられ、定住することを求められる。古代地中海世界の一大農業国家だったエジプトが、しばしば「都市なき文明」といわれるのも、この点から考えれば首肯しうる。都市の公職者が、ひとの流れ、金の流れ——つまり流通をスムーズにするフローを求められているとしたら、国家の官僚が求められているのは、河川の流れを一定の範囲に押しとどめ、貯蔵するためのダムや堤防をつくるテクノロジーである（今日でも、金をばら撒くなどして社会の流れを変化させたがる政治家と、変化を嫌って緊縮を求める財務官僚の対立は、しばしば目にするお決まりの光景である）。エジプトは、地中海世界における国家の最良のモデルを提供しているのである。

その意味では、マルクス主義史学以来の伝統が、農村のもたらす食料供給、すなわち余剰生産物によって都市が可能になることを論じていたとき<sup>★44</sup>、ここでいわれている都市は、きわめて国家に近しい形で把握されていたと考えてよいだろう。都市を発生論的に論じようとする、人類に先立つ唯一の神が求められるのと同じように、それに先立つ食料の余剰を考えざるをえなくなる（だから人間とは、神の余剰である）。そこで学者がこぞって食指を伸ばしたが、農業だった、というわけである。都市や国家の形成が、経済的な下部構造によって決定されるという議論は、これらの形成には先立つものが必要であるという、発生論的・因果論的な議論を暗黙のうちに前提することでありたっている。だが、この種の論理は、考古学的な証拠が、都市や国家の起源をますます古いほうへ追いやっている事実と相反している。都市や国家は、先行する生産様式に依存して可能となるのではないし、したがって人口規模によって定義することもできない。ある種の傾向やベクトルとして、たえず存在し、しかも共存していると考えたほうが、結局は実態に即しているのである（たとえば首都としての東京は国家のほうを向き、都市としての東京は国家に反対するということがありうる）。

かつてブローデルは、都市と国家について、こんな風に語っていた。

国家と都市という、二人のランナーがそのつど現れる……そしてヨーロッパ全体のどこに目を向けても通常、勝利するのは国家である。……国家は暴力によってであろうとなかろうと、

本能的ともいえる執拗さで都市を調教した……、国家は先行する都市にギャロップで追いついたのである。<sup>★45</sup>

歴史学者によってさかんに注目された都市は、すでに国家＝官僚制度に捕らえられ、本来の姿から遠く離れているものがほとんどである。こうして国家化された都市においては、たとえば京の率分閥のように、ひとびとの移動を制限することによって、空間を閉ざし、その内部で歴史を垂直に蓄積していけるようになる。だから外部空間は、都市の場合と異なり、ひとの移動によって形成されるのではない。たとえば属州や植民地のように、獲得される、われわれ歴史学者は、あまりにも国家の思考法に慣れてしまった。ここでは、都市はほとんど小国家の形でしかあらわれない。地域史がいかに蓄積されようと、定義上、域外との交流を本質的に扱えない以上、それらはすでに、小首都としての県庁と周囲の農村を領土とする、小国家の歴史でしかない。都市と国家の実態的多様性に目を奪われて、両者を概念的に十分に引き離して考えないかぎり、せつかく都市があつかっても、国家の歴史に自動的に組み込まれてしまう。孤立した地域史蓄積のあと、学者のとりくむべき課題は、都市間のネットワーク、道の歴史の再検討であるべきだろう。

その意味で、考古学と歴史学の差異は、都市の歴史にも色濃く影を残している。天武持統朝とは、はじめて正史の書かれた時代であると同時に、君主の世代交代と宮城の移動との結合が切れた時代でもある。すなわち、その場を占める者に依存しない、場のほうの優



越を意味する《玉座》が生まれたのである。それ以前、君主の宮城は代が替わるたびに移動し、それゆえ王の不在は同時に玉座の消滅をも意味していた。都市に刻まれた事績は都市ごと土の下に埋もれていったのだ。したがって必然的にも現実的にも、それは歴史というより考古学の対象だったのである。しかし、天武統朝の藤原京建設以後、世代にかかわらず玉座がひとつの場所にとどまるという理念の生まれたことが、はじめて歴史を可能にした。というのは、ひとの寿命に依存せず、一連の出来事の因果性が都市のさまざまな場所に刻まれて蓄積され、無数の死を折り畳んだ、歴史の名にふさわしい持続性が獲得されるからである。だから、本格的な国家の歴史がはじめて書かれたという事実と、その場を占める者に対する場の優越を示す、移動しない《首都》の概念の誕生とは、きわめて分かちがたく結びついている。

その点、歴史学者には深い注意が要求される。人類史のできるだけはやい段階から都市の存在を見出そうとする考古学者に反して、<sup>★46</sup>多くの歴史学者は、藤原京に起源を見出そうとしてきた。<sup>★47</sup>だが、この見解の相違は、実態の側の正当性よりも学問の形式に多くを負っている可能性がある。歴史学者の見出す都市は、多くの場合、どれほど実証的に考察が進められていようと、すでに国家によって捕縛された都市でしかない。歴史学者は首都や県庁から降りていくのであり、あるいは農村から都市へと昇っていく。中心―周縁図式のみで動いているかぎり、都市の本質はすでに失われている。

さて、なぜわれわれは、都市と国家との歴史のかつ概念的な差異

に注目するのか。それは、前近代と近代とを分かつ画期に、《首都》の移動があったからである。われわれ歴史学者は、いわゆる「奈良時代」――玉座が生まれるとともに、はじめて国家の歴史が書かれた頃――以来、時代を為政者の所在地で論じること慣れてきた。つづく平安、鎌倉、室町、安土桃山、江戸、すべて頂点に立つ為政者の本拠地の名であることに、異論の余地はない。その意味では、すくなくとも日本における首都の移動には、たえず革命的な要素がつきまといっていたのだが、そうした移動そのものを土の下に隠してしまい、為政者の本拠地を中心とした「時代区分」のなかでしか、歴史を描いてこなかったように思われる。われわれが、近代都市の考古学を必要とすると考えたのは、古い首都（京あるいは江戸）と新しい首都（東京）とのあいだの《道》、すなわち古い江戸国家と新しい明治国家のあいだの《革命》に焦点を当てるためである。出来事は、《道》で起こっていたのだ。

### 第三章 東京遷都が旅する天皇か

東京遷都の宣言は、公式には一度もなかった。このことが、歴史学者の興味をひいた。<sup>★48</sup>明治以来、天皇の住まう東京が事実上首都であるのはいうまでもない。だが、宣言を欠くという形式を重視するなら、別の解釈もなりたつ。依然、京都は唯一の首都である、という形式主義的主張はいささか極端としても、せめて東京・京都の両都並立を認める奠都という主張は可能ではないか？

遷都か奠都か——しかし、歴史を前後に分かつ最大の画期のひとつを描く問いとして、この問いはふざわしい奥行きをもっているだろうか。先にみたとおり、時代を為政者の所在地で描いてきた歴史学の伝統を考慮するならば、形式論にとどまらない重要性を、この謎に認めてよいと思われる。この問いは、変革ではなく統治の観点からみる国家主義的な固定観念——国家には首都があるものだという文字通りのCapitalism——を内在させている。だが、前近代において、関東と将軍、京と天皇という場所とその場を占めるものごとが一体となった、意味化された異質な空間が存在していた。異質で起伏に富んだ諸空間をさておいて、日本の本拠地はどこか、と問うことは、前近代と近代の隙間に生じた《ひとびとの移動》という具体的な出来事を覆い隠してしまう。大日本帝国憲法発布と同じ一八八九年に公刊がはじまった『言海』によれば、「みやこ（宮庭）」とは、「帝王ノ住マセラルル地ノ称」<sup>49</sup>である。あくまで主体は玉座ではなく帝王の側にあるのだから、その帝王が流浪するならば、この語は現実的意味を失うか変えるはずである。やや悲観的にいえば、歴史学者にとって、ひとびとの移動という内容・表現的問いよりも、場の中心はどこか——国家の本拠地はどこか——という、人間不在の実質・形式的問いのほうが答えやすいのかもしれない。だが、国家というアプリオリの崩壊する革命期をあつかう問いとしては、いささか中立を欠く。だから、どこが首都なのか、という国家主義的な問い、あるいは首都は単数なのか複数なのか、という国民主義的な問いよりも先に問うべき問いがある。すなわち、京から江戸／東京への天

皇の移動は、東京遷都なのか、それとも《旅》なのか。

近世の女の旅について、島崎藤村はこういつていた。

ころろみに、十五代将軍としての徳川慶喜が置土産とも言うべき改革の結果がこの街道にもあらわれて来る前までは、女は手形なしに閑所も通れなかつた時代のあつたことを想像して見るがいい。従来、「出女、入り鉄砲」などと言われ、女の旅は閑所々々で喰い留められ、髪長、尼、比丘尼、髪切、少女などと一々その風俗を区別され、乳まで探られなければ通行することも許されなかつたほどの封建時代が過去に長く続いたことを想像して見るがいい。高山霊場の女人禁制は言うまでもなく、普通民家の造り酒屋にある酒蔵のようなどころにまで女は遠ざけられていたことを想像して見るがいい。幾時代かの伝習はその抗しがたい手枷足枷で女を捉えた。そして、この国の女を変えた。遠い日本古代の婦人に見るような、あの幸福で自己を恃むことが厚い、種々な美しい性質の多くは隠れてしまった。ころろみに又、それらの不自由さの中にも生きなければならない当時の娘達が、全く家に閉じ籠められ、すべての外界から絶縁されていたことを想像して見るがいい。しかもこの外界との無交渉ということ、彼女等が一生涯の定めとされ、歯を染め眉を落してかしく彼女等が配偶者となる人の以外には殆んど何の交渉をも持てなかつたことを想像して見るがいい。<sup>50</sup>

一方、古代貴族の女性について、折口信夫はこういつていた。

〔万葉の頃の〕 貴い女性がさういふ旅にさすらふといふ話を、  
沢山集めれば集められるのです。男ばかりが旅をしてゐる訣  
ではない。女の人も旅をしてゐる。併しそれはずつと後世の  
事とする考へ方がある。日本の女の人はどこにも出ない。家  
をも出ないと考へて来てゐる。平安朝時代の貴族の女性は、  
自分のゐる室すらも出ないものとなつてゐる。：さういふ風  
に、女の人は、本たうに陽の目も見ないやうな、部屋に生活  
をしてをつた。：万葉集を見ますと、女人の旅のことも沢山  
出て来、人中に這入つて旅するといふこともあるし、一人旅  
をする女のこともあります。<sup>★51</sup>

ある地点に玉座が固定されて歴史が描かれる以前、旅する古代の  
女の姿を、いくつかの古い歌の考古学的読解から想起できる。十市  
皇女の手になる二歌、大伯皇女の手になる二歌をあげておこう。

山吹の立ちよそひたる山清水 汲みに行かめど道の知らなく  
霰降りいたも風吹き寒き夜や旗野にこよひわがひとり寝む

二人行けど行き過ぎ難き秋山を いかにか君が独り越ゆらむ  
磯の上に生ふる馬酔木を手折らめど 見すべき君がありとい

はなく

旅につきまとう困難はいつどこにもあつたとしても、ひとが歴史  
を書くよりも歌を歌つていた時代には、貴い女もまた、男と変わら  
ず気ままに旅をしていた。歴史が歌に取つて代わる頃から、次第に  
貴い女の旅は困難になつた。統治の末期にいや増す桎梏の厳肅さは、  
女をいつそう苦しめた。しかし、近代前夜の二八六一年、われわれ  
は考古学の時代以来、もつとも長距離にわたる皇女の旅があつたの  
を知つてゐる。和宮降嫁である。行路は先に薩摩の鎌田正純が通つ  
た中山道、しかし今度は逆向きに、京から江戸への旅。当時の様子  
は、馬籠の庄屋大脇兵右衛門信興の『年内諸事日記帳』には次のよ  
うに記されていた。

十月二十九日——曇、少々雨。夜中、大雨。

：姫君様一行中津川宿お泊り。

和宮御通行（この日三留野宿お泊り予定）

十一月朔日——雨降り。九ツ半時御通行。前代未聞、この世  
相初まり候てより之御通行と申事にて、二十九日夜より朔日  
夜に入るまで、人絶ゆることなく、ゑい通しにて、昔軍之如  
くと申事に候。尾州方、御方目御役人方、御行列、長鈍鉄砲、  
マトイ、バレン、其他、軍陣立の如く、皆々御同勢徒士にて陣笠、  
腰弁当にて御供一人ツ、召連れ、和宮様御通り切直く御跡へ  
右の行列夥敷事にて、町内真闇く相成り、人々よけ合など少

しも出来不申極々難渋、筆紙に尽し難く候間、後年に至り咄  
 の種とあらまし記す。<sup>★52</sup>

一雨のなか肅々と木曾路をゆく皇女の旅。お陰参りがあり、お札降  
 りがあり、戊辰戦争、東京遷都、西南戦争とつづくひとびとの巨大  
 な移動、古い統治状態を攪拌する渦の中心に、「前代未聞、この世  
 相初まり候てより」の女の旅があつた——近代前夜、まるで古代の  
 皇女たちによる旅の再生かのように。折口の語る古代と藤村の語る  
 幕末のあいだの長く暗い時間は、ここに終わる。歴史に携わる者は、  
 過去を論じるより過去に寄り添わねばならない。われわれの興味は、  
 国家統治の観点から本拠地の移動を論じること——それによつて革  
 命を覆い隠すこと——ではなく、維新の瞬間に生じていた、異質な  
 諸空間をつなぐひとびとの旅と、行動を促した精神にある。

いくつか、同時代の遷都論を読み込んでいこう。もつとも早い遷  
 都論といわれる、文久二年（一八六二年）四月の平野国臣「回天三  
 策」から（以下、読者の便を図るため、引用文に適宜傍点を付した）。

島津和泉滞在中、綸命下り、直ニ花城ヲ抜き、彦城ヲ火シ、  
 二城之城ヲ屠リ、同時一勢ニ率テ、和泉將帥トシテ上京シ、  
 幕吏ヲ追払ヒ、粟田ノ宮ノ幽閉ヲ解奉リ、参廷ノ上、聖駕ヲ  
 奉シ、蹕ヲ花城ニ奉遷、皇威ヲ大ニ張リ、七道ノ諸藩ニ命ヲ  
 賜ヒ、陛下親シク兵衆ヲ率ヒ賜ヒ……<sup>★54</sup>

「花城」すなわち大坂への遷都が、当時の軍事的情勢に起因する倒  
 幕戦略の一環として提起されている。この点で、佐々木克がいうよ  
 うに、遷都の語を含まないこの意見書を、遷都論とみない観点も可  
 能と思われる。その意味で、次にみる文久三年七月の真木和泉の「五  
 事建策」を、佐々木の表現を借りれば「現実的」な、最初の遷都論  
 とみることに一理ある。「浪華は天下の咽喉にて、金穀の聚まる  
 所なれば、諸侯の権を攪るにも一の便あり」という経済的・国家経  
 営的観点が含まれているからである。

#### 一、移蹕浪華事。

大事業を為すには、必旧套を脱せざれば不叶、旧套を脱する  
 には、従来之居を離れて事を簡易にすること第一義なり。孟  
 子に、齊景公出居雪宮と申たること能々考ふれば、深き味あ  
 ることなり。且浪華は天下の咽喉にて、金穀の聚まる所なれば、  
 諸侯の権を攪るにも一の便あり、其うへ一歩進むの勢ありて、  
 夷狄を御するにも亦余ほどの利あり。此一挙は必挙げさせら  
 るべきことなり。<sup>★56</sup>

しかし、さしあたり注意を喚起するにとどめるが、「従来之居を  
 離れて事を簡易にすること第一義」の一節がある。つまり経済的・  
 経営的観点は、「第一義」実現のための説得材料である。では、慶  
 応三年（一八六七年）末の大政奉還後、薩摩藩士伊地知正治の遷都  
 論をみてみよう。

夷人との応接ハ、至難之事故、恐くは堂上方是を武人斗ニ託センとして、再度朝権ヲ失ひ給候半歟掛念之至候、仍而勘考仕候ニ、夷人京師住引統而、主上ニ拝謁を奉願ハ必定なれば、早く此方ニ而浪華へ遷都之儀御治定相成度、主上御諒隱中ニハ、外国人ニは御逢無之御国法之段被仰論置度、子細ハ宇内之形成今日ニ立至候而は、今之京都ハ、土地偏少、人氣狹隘、堂々たる皇国ノ都地ニ非ず、且又各国之王都を歴見し、江戸城をも見たる夷人をして、今之皇居を見せ候半ニハ、日本中尊卑ノ分ヲ不知ノ大恥、全世界ノ辱名と成へし、況追々御手外国ニ及候御時節ニ候得は、海辺ニ都し統伐便利ニ御座候付、昔ハ三韓御征伐之時分ハ難波ニ都ヲ遷し給、又古人も人氣之因循を抜ハ、遷都ニ若くはなしと歎申居候、扱ハ今之本丸を皇居としニノ丸ニ百寮ヲ御設け、皇城ノ四方大諸侯ニ邸地を賜り、邸外ニ砲基を構へ列藩之番兵是を守衛し奉り、来年ノ九月ニは浪華之皇城ニ被遊御即位之時情ニ從而、不拔之御政事条理相立候ハバ、内治皇国外御百蕃皇威盛成ル日を数へて可奉待

□と奉存候：<sup>57</sup>

これも首都の遷移先は大坂である。京都の「土地偏少」および「人氣狹隘」が指摘され、明確に「遷都」の語が国家構想とともに述べられている、ようにみえる。ただし、傍点を付した箇所のみられるごとく、「海辺ニ都し統伐便利」、「古人も人氣之因循を抜ハ遷都ニ

若くはなし」とあり、京都が諸々の理由で否定されても、遷移先が大坂であるという積極的な理由はない。肝心なことは、海に面して天皇が移動することである。

こうした移動自体を目的とする遷都論の頂点をなすのが、次に示す、慶応四年（一八六八年）一月頃の大久保利通の建白である。

弊習トイヘルモノハ、理ニアラズシテ勢ニアリ、勢ハ触視スル所ノ形跡ニ帰ス可シ、今其形跡上ノ一二ヲ論ゼンニ、主上ノ存ス所ヲ雲上ト云ヒ、公卿方ヲ雲上人ト唱へ、龍顔ハ拝シ難キモノト思ヒ、玉体ハ寸地ヲ踏ミ給ハザルモノト余リニ推尊奉リテ、自ラ外ニ尊大高貴ナルモノ、様ニ思食サセラレ、上下隔絶シテ、其形今日ノ弊習トナリシモノナリ、敬上愛下ハ人倫ノ大綱ニシテ論ナキコトナガラ、過レハ君道ヲ失ハシメ、臣道ヲ失ハシムルノ害アル可シ、仁徳帝之時ヲ、天下万国世称賞シ奉ルハ外ナラズ、即今外国ニ於テモ、帝王従者一二を卒シテ、國中ヲ歩キ、万民ヲ撫育スルハ、実ニ君道ヲ行フモノト謂フ可シ、然レバ、更始一新、王政復古ノ今日ニ当リ、本朝ノ聖時ニ則ラレ、外国ノ美政ヲ庄スルノ英断ヲ以テ、挙ゲ給フベキハ、遷都ニアルベシ。<sup>58</sup>

天皇の居所は「雲上」と呼ばれ、天皇の側に仕える公卿を「雲上人」という。当然、その反対側には下界の人間がいるわけだが、こうした表現が可能なほど「上下隔絶」の「弊習」が生まれ、「道ヲ

失ハシメ」たのは、天皇がその場を動かなかったからにほかならない。だから、大久保はこういうわけである。「帝王從者」二を卒シテ、國中ヲ歩キ、万民ヲ撫育スルハ、実ニ君道ヲ行フモノト謂フ可シ」と。大久保の主張した遷移先も大坂だが、戦略上の問題はあれ、大坂であることに、その後の国家ヴィジョンを託すほどの理由はない。問題は「数百年来一塊シタル因循ノ腐臭ヲ一新」するべく、ただ《旅すること》である。どこかに留まることなく「國中ヲ歩く」ことが、「天下万人感動涕泣イタシ候程」の「国内同心合体」「上下一貫」を可能にする。中国の皇帝が「天空の玉座」<sup>★59</sup>にあるのに対し、しよせん流れ者である日本の天皇は、古来、もつぱら旅をしてきた。南島から、朝鮮半島から、あるいは豪族のつくる家に代替わりのたびに仮寓して――。彼ら志士たちの遷都論は、国家に存在しているべき、諸都市に優越する唯一の《首都》、という概念を決定的に欠いている。また王政復古のち、慶応四年閏四月に大木喬任・江藤新平が以下のように語っていたことも、同じ観点から理解可能である。

一、慶喜へハ成丈け別城ヲ御与へ、江戸城ハ急速ニ東京ト被相定、乍恐、天子東方御経營御基礎之場ト被度、江戸城を以東京ト被相定、行々之処ハ、東西両京の間ダ鐵路ヲも御開キ被遊程ノ事無之而ハ、皇国後來兩分之患ナキニもあらずト被考候。且東方王化ニソマサル、数千年ニ付、於當時も江戸城ハ東京ト被相定候御目的肝要ト奉存候。

：於是右之通り、公然御普告、江戸ヲ以東京ト被相定候ハズ、

東方之人民モ甚安堵大悦致候、去らバ皇威ヲ光張シ、東方ヲ鎮定シ後來ヲ維持ス、此レ是ノ間御処分如何ニ極リ可申候、如此ハ其關係甚大ナリトス、深く御考量奉希望候。<sup>★60</sup>

遷移先は江戸である。「東方王化ニソマサル」数千年」。大木や江藤ら志士たちが考慮しているのは、敵地としての江戸である。敵のまったく中に天皇が入場することに意味がある。ここにあるのも、「東西両京の間ダ鐵路」が開通するまでのあいだ、日本を統一するために行なうべき、軍略あるいはその延長に配された意味での政略上の、君主と大将の敵地への移動および占拠にほかならない。江戸の特権性は、あくまで敵地というにある。敵地の王化が済むまでの一時的滞留が目されているにすぎず、鉄道が開通すれば、天皇は両京を必要に応じて行き来すればよい、といっているだけである。

だが、同じ時期に提示されたもうひとつの、画期的な遷都論がある。維新以前にすでに幕府の官僚だった前島密のそれである。それは、志士たちのものとは決定的に異なる。多くの歴史学者は、遷移先に東京を指定した最初のまとまった意見として評価しており、ニュアンスの差はあれ、その他の議論と同列に並べている。しかし、よく読めば、その質的な差異は明瞭である。

東北の形成日を逐うて不穏なりとの報頻々たり。果して然らば内憂外患愈々大ならん、何とか鎮定の方策無かるべからずと思慮せし際、故大久保利通卿の遷都論を読み、讚歎敬服

したるも、遷都地を大阪と指定したるを見て之に服せず、以て遷都の地は必然江戸ならざる可らず、是帝国永遠の大猷たるのみならず、現時東北の動乱を鎮定するの大策なりと。

：遷都の地を江戸に定めらるゝの大英断有之、鳳輦ほうけん東下の  
大令一下せば、忽ち関東奥羽の山壑は霜雪消融して春風和氣を發すべく、群生歡呼万歳声裡に鳳輦を迎へ奉る準備に取掛可申候：大政府所在の帝都は帝国中央の地ならんを要す、蓋し蝦夷地を開拓の後は江戸を以て帝国の中央とせん：此開拓事務を管理するは江戸を以て便なりとす、浪華は甚だ便ならず：  
★<sup>61</sup>

前島の議論も、すくなくとも前半部分に関するかぎり、それまでの遷都論と同様である。つまり、戊辰戦争の行く末を見据えた、大坂を越える軍略上の最重要拠点として、遷移先を江戸に指定するにとどまる。だが、注目すべきは引用の後半である。というのは、彼が論じる江戸は、国家の帝国主義的統治の心臓としての《首都》だからである。「帝国中央」はどこか。広大な「蝦夷地」を世界で始めて植民地とする、明治国家の中枢はどこにあるべきか。このことが、江戸をその他の都市にもまして、特権的な場に押し上げている。ここにあるのは、街道によつてネットワーク化された空間における王者の自由な移動、という観点ではない。もっぱら同心円的に拡大していく中心―周縁図式からなる、帝国統治の不動の中枢、すなわち座標軸の原点はどこにあるべきかという、まったく新しい

問題構成である。江戸＝東京が、人気を一新するための滞留先としてでなく、国家における座標軸の原点として示されたのだ。だから、ある意味では、前島の遷都論こそ、最初の遷都論である。なぜなら、志士たちの遷都論は、論理的には、東京や大坂が永続的な首都となることも、京都が否定されるのと同じ理由で妨げているからだ。いわば首都否定論なのである。何度もうように、「首都はどこか」という問いは、革命ではなく統治の観点を潜ませている。この問いを發する者にとつて、前島の遷都論は優れてみえるだろう。その他の遷都論に欠落した、あるべき議論がなされている、という風にもみえるだろう。だが、《首都》という概念があらかじめ有している国家主義的イデオロギーに注意深くあれば、同列にはあつかえないほど、論点が本質的に異なっているのが理解されるはずである。

明治元年十月十三日、和宮降嫁のあとを追うように、しかし今度には東海道を通り、二十三日間かけて、歴史はじまつて、以来の天皇の江戸行幸があつた。同時に江戸は東京に、江戸城は東京城に改称。朕今萬機ヲ親裁シ億兆ヲ綏撫ス江戸ハ東國第一ノ大鎮四方輻湊ノ地宜シク親臨以テ其政ヲ視ルヘシ因テ自今江戸ヲ稱シテ東京トセン是朕ノ海内一家東西同視スル所以ナリ衆庶此意ヲ體セヨ」（江戸ヲ稱シテ東京ト為スノ詔書）。同年十二月八日には十五日間かけて京都へ「還幸」、翌年三月には東京へ再幸、明治四年八月二十三日には京都留守官廃止、同年九月十四日には東京禁苑に神殿を創建、神器と皇靈を奉安。そして翌明治五年五月、西国（京都中国九州）行幸があり、京都へは還幸と呼ばずに「行幸」といった。この留守官の廃止

と「行幸」をもって、つまり東京へ「還幸」となることをもって、事実上、首都は東京になったとみなす論者は多いし<sup>★62</sup>。それもまちがいはない。しかし、それは、国家には首都があるものだという前提をあまりに無条件に受け容れた意見である。志士たちの目論見はそうではなかった。東京が都になるといつても、のちに公職者となった維新の志士たちにとっては、天皇の移動の結果にすぎない。大事なのは、場ではなく場を占める者のほうである。天皇が自分の家を出て、敵の家へ仮寓する、そのことだ。彼はずつと途上に、道にいる。つまり行幸中であるべきなのである。だから、京都へ帰ることも「行幸」と呼んだとき、真逆の解釈もまだ可能だった——首都はなくなったのだ、と。いつの時点で首都が東京に遷ったのかという形式的な問題に注目するよりも、天皇が東奔西走し、居場所をひとつに定め（られ）なかったことに注目してもよかった。そちらのほうが、形式に勝る現実だからである。

★63 明治天皇在位中の臨幸地はじつに千数百という異様な数にのぼる。明治九年には戦後まもない奥羽を巡り、十年には再び京都、そして大和へ、十一年には北陸東海、十二年には山梨三重京都、十四年には東北から北海道へ。その間、関東にあつても横浜や横須賀、浦和や水戸などへ巡幸を繰り返す日々である。鉄道の整備もままならない時代に行なわれた、数え上げれば切りがないこうした長い旅路は、崩御前年十一月の久留米行幸、翌年の千葉行幸までつづく。「彷徨五年」といわれた聖武天皇、大和から伊賀、近江、美濃、尾張を巡って伊勢に旅した倭姫命、旅をした古代の皇族は数あれ、こうし

た天皇は、日本史上まったく類例がない。家を出て、旅をし、もつとも疎遠な場所に住むこと。日本中どこへ行くことも行幸であり、仮寓であり、この旅なしには、日本の統一は可能にならない。なぜなら日本という国家は、切れ切れに分断された「列島社会」だからである。道をゆくことによつてしか、日本という単位は現れない。帝王従者一二を卒シテ、國中ヲ歩キ、万民ヲ撫育スル」こと。志士たちの真つ向から取り組んだ問いがついに意味を失い、いまだは歴史学者から黙殺されかねない響きしかもたなくなるのは、おそらく明治天皇が死に、大正天皇が東京に「押し込め」同然に存在するようになった瞬間である。その場を占める人間より場のほうが優位であるような、動かない玉座としての首都は、たとえ遷都の宣言を欠いていても、原理的には、このとき確立されている。大正天皇以来、ふたたび天皇は雲上のひとなつた。終わりからみることを常とする歴史学者には、連綿とつづくべき国家の歴史が、また姿を変えて現れたことで満足かもしれない。だが、維新を成し遂げたのは、どう考えても志士たちである。それを学者は、官僚の作文を通して読み解く。変革ではなく統治の観点から紐解こうとする。優れていたのは、画期をまたいで存在していた官僚たちに見えてしまう。しかしそれでは、革命の瞬間に生じた出来事は、なかなか見えてはこない。

#### 第四章 近代のテクノロジー

「どこが本拠なのか」（天皇と將軍とはどちらが偉いのか、それと



も両者とも偉いのか……)という、統治の空間を暗黙に前提した問いが、東京を唯一の首都にする。歴史学者の何気ない問いが、歴史を無視して答えを作ってしまったっているのだ。移動の結果にすぎなかつたものが、座標軸の原点と取り違えられてしまう。学者は、領土の原理を革命にあてはめ、近代国家の統治体制としてしか天皇の移動を考察したのではない。あそこでもここでもあり、かつここでもあそこでもない。こうした答えを聞いたら、学者は嘲笑うだろう。

動かない玉座を中心にした国家的蓄積が、地層をつくり、「上下隔絶」を生む。われわれは、首都が移動していた時代の歴史を考古学としてしか紐解くことができない。まるで、本拠地における累積的事象としてしか、歴史は存在できないかのようだ。

とはいえ、そうした統治の観点がありうるのも事実である。たとえば小路田泰直は次のように問いかける——《国家はどこにあるのか》、《なぜあそこではなくそこなのか》。この問いあつてはじめて、《本拠はどこか》と問いかけているときには前提であることを超えられなかつた統治が、考察の対象になる。大坂ではなく、東京であるべきといった前島密の遷都論は、そのすぐれた解答のひとつだった。次の問いは《いかに》である。動かない玉座によって、遠く離れた場所をいかにして一体的に統治するのか。一般的にいえば、各都市に派遣された官僚が中央と周縁をつなぐことで、その役割をはたす。中央から周縁へ放射状に延びた、どこへ行くにもたえず中心を通過する回路が、国家を均質に統治しようとするのである。われわれは、前近代と近代のあいだ、一瞬の隙間に生じた《旅》に注目し

たが、統治の観点において、小路田の指摘は的確である。<sup>★64</sup>都市を近代化したのは、《都市官僚》という矛盾した存在であり、この矛盾を埋めたのが、絶対者を戴く天皇制や立憲政治であるという。

しかし、旅路の宿ではなく、領土をくまなく埋めつくす行政諸区画の「中心」と都市が移行するには、まだ謎がある。歴史的には、こうした中央集権政治は、とかく日本ではうまくいかなかつたはずである。たとえば荻生徂徠が「天下を知ろしめさるる上は、日本国中はみな御国也。何もかもみなその物を直ちに御用いなさるる事なる故、御買上げという事はなきはず也」といおうと<sup>★65</sup>もつと別種の空間概念——ひとを疲労させ、悩ませ、ときに集権的統治を逃れる憩いの場を設ける現実の地理的起伏が、それを不可能にしてきたからである。だから弟子の太宰春台のような儒者が統治範囲の局限された周代の六官制に理想をみたのは、<sup>★66</sup>もとより論理矛盾である。徂徠が「日本国中はみな御国也」とあえていわねばならず、また結局それは実現しないという宿命的困難がたえずまちかまえていたのである。その意味で、日本の歴史に決定的な分裂を指摘した網野の議論は、やはり不朽の価値をもつ。そこから次の言い分にも説得力が生まれていた。近代国家の統一イメージは網野によれば「イデオロギー」にすぎず、小熊によれば「神話」であり、アンダーソンや柄谷によれば「想像」の産物である、と。逆に、そうした自然な分裂を無理矢理統一させる、暴力装置の存在を指摘するマルクス主義者や萱野の意見もまた、正当性を帯びて映るようになる。だが、ほんとうにそうか。近代国民国家を作為性の側に割り振ってしまう意

見は正しいだろうか。

ブローデルの言葉を思い出そう。「国家と都市という、二人のランナーがそのつど現れる…そしてヨーロッパ全体のどこに目を向けるとも通常、勝利するのは国家である。…国家は暴力によってであろうとなかろうと、本能的ともいえる執拗さで都市を調教した…、国家は先行する都市にギャロップで追いついたのである」。われわれはブローデルと異なり、都市が国家に先行するわずかな時間に、あえて注目した。この時間を拡大鏡で眺めて、都市の都市性を強調しようとした。なぜなら、維新の瞬間にあつたのは、歴史上数えるほどしか現れない、都市が先行する希有な時間だったからである。

薩摩も長州も土佐も肥前も、前近代には京都や江戸のはるか周縁に位置する一地方にすぎず、近代以降もまた、たとえ藩閥政府に数多の人材を輩出しようと、大日本帝国の一地方にすぎなかつた。ならば維新は、中央政府に対する虐げられた地方都市の反乱というおなじみの構図でみるべきだつたらうか。否、誰もそう思わない。それだけでは、周縁が中央に勝利する理由を説明できないからである。ならば次のような見方はできるだろうか。英明な藩主と、そのもとで育成され登用された優秀な人材がもたらした、江戸後期の軍事的経済的発展の賜物である、と。しかしそうした教科書の説明も、個人の資質という偶然に起源を預け、それ以上の叙述を放棄する英雄史観の亜種でしかない。既存の国家大の構図で歴史を紐解くのを、このときばかりはやめねばならない。あのとき起こっていたのは、秘めやかではあつてもずっと巨大な変化である。すなわち、国家的

な時空間から都市的なそれへの決定的な構造転換である。薩長土肥の藩主の住まう城下町は、十九世紀初頭のフェートン号事件以来、さまざまな軍事的衝突も含めて海外勢力と独自に折衝し、江戸との橋渡しの役割を果たしていた。つまり周縁ではなく、ロンドンやパリなどと江戸とを結ぶ遠大な《道》のちょうど中心間にあつたのである。それだけではない。極東のさらに東からやつてきた驚くべき客人、ペリーの来航をかきりに、江戸もまた、京都と海外都市とをつなぐちょうど中間地点に位置する一都市へと転落する。こうして国家が後景にひき、無数の線が交錯する都市のネットワークが前景化する。海路と陸路のネットワークからなる都市的空間において、たとえ一瞬の光芒にすぎなかつたとしても、都市中の都市として、これら城下町は都市性を帯びて存在していた——ブローデルの表現を逆転させれば、こうして都市が国家を追い越したのである。

一都市だけを中心し首都として、その他を均一に周縁化するためには、潜在的な周縁が中心から遠く離れているだけでは足りない。離れているにもかかわらず、中心と結びついていなければならぬ。そうでなければ、いくら官僚を送り込もうと、半独立や自治を認める昔ながらの日本像が維持されていたはずである。国家が都市を捕らえ、なおかつそれらを周縁化するために、歴史がどうしても必要としたもの、それはなにか。イデオロギーではない。《テクノロジ》である。とりわけ、鉄と蒸気機関、ダイナマイトと電気にもとづく西欧近代が生み出したテクノロジがあつたればこそ、「日本の首都はどこか？」という問いが条件なしに正しい問いにみえるのだ。

なぜなら、維新後急速に普及したテクノロジーは、《旅》の時空をほとんど一掃してしまつたからである。歴史学者が無意識に同意を与え、恣に拡散するのを暗黙に認めているテクノロジーの歴史を、われわれはもう一度掘り返さねばならない。

一八八八年、自由民権家の中江兆民は「工族諸君に告ぐ」と題する評論で次のようにいつていた。

我が日本今日迄の経済社会は、其原資不十分に其構造不完全にして、此社会の重要な部分を占む可き工業的実業者は殆んど有らざりし程の事なるが故に、今に於て一議を発し工業的実業者の注意を促がすと云ふよりは、寧ろ該実業者の發生せんことを望むと云ふこそ適當なれ。…近日鉄道起業の盛に流行して、全国到る処鉄道漸ならざる莫し。結構なる事なり。百里の長程を短縮して、人物を運搬し知識を運搬し、山河の墻壁を取り除ひて日本国を一座敷の大広間と為し、津軽、松前の人と長崎、熊本の人と四五日の間に相ひ会して相談を纏めることを得せしむるに至るは、結構なる事なり。然ども鉄道の列車は、人力車の如く人を載するを以て重もなる業と為すに非ざる可し。貨物も亦乗客の中なる可し。貨物の乗客沢山なるに非ざれば、鉄道は畢竟迅速なる人力車たるに過ぎずして、朝に松嶋、塩竈の勝を探ぐり夕に橋立、厳嶋の景を弄し、予め会宴時のために談話の財料を貯へ置かんと欲する金満家兼美術家の用に供するに過ずして、経済社会に納むる租

税は到底甚だ多からざる可し。経済社会に於ける鉄道の務は、風流人を運搬するものに非ずして、商買人を運搬するものなり。商買人は風景の美に誘はるるに非ずして、貨物の利に引かるるが故に、少くとも往きか還へりの一に於て貨物と同車するに非ざれば、百里の路を空く旅行するものに非ざるなり。…学術の大仕掛の工業が肝要と為るの順序なり。技術と資本と婚媾することが肝要と為るの順序なり。僅々十本の指を機械として、傘や扇や塗物を製造する位にては余りに残念なるに非ずや。<sup>★67</sup>

つまり鉄道は、「山河の墻壁を取り除ひて日本国を一座敷の大広間」にする。だがそれだけでなく、人間の旅は、貨物の移動に変わらねばならない。学問や経済は、技術と結婚せねばならない……。思えば、福沢諭吉が智慧の機能について語るとき、次のようにいつていたことが想起されてよい——「上帝の恩沢、洪大なりといえども、衣服は山に生ぜず、食は天より降らず。いわんや世の文明次第に進めば、その便利、ただ衣服飲食のみならず、蒸気電信の利あり、政令商売の便あるに於てをや。皆これ智慧の賜にあらざるはなし」。<sup>★68</sup>（統計学や試験（＝実験）への多大な関心からもわかるとおり、人間精神のはたらきを徳義と智慧とに分けた福沢の真意が、テクノロジー＋ロゴス（技術智）の抽出にあつたのはあきらかである。

古の聖人をして今日にあらしめ、今の経済商売の説を聞かし

め、あるいは今の蒸気船に乗せて大洋の波濤を渡り、電信を以て万里の新聞を瞬間に聞かしむる等のことあらば、(今人は)これに落胆するは固より論を俟たず。：如何となれば、この蒸気、電信、製紙、印書の術は、悉皆後人の智慧を以て達し得たるものにて、この発明工夫を為すの間に、聖人の言を聞て徳義の道を実に施したることなく、古の聖人は夢にもこれを知らざりしことなればなり。故に智慧を以て論ずれば、古代の聖賢は今の三歳の童子に等しきものなり。<sup>★69</sup>

端的にいつて、福沢のいう「智慧」は、テクノロジーを意味している。いったい、それは、人間精神のうちでどのような場所を占めるにいたったのか。東海道線全線開通は、兆民の評論の翌年、明治憲法発布と同じ一八八九年である。封建制から、天皇を頂く明治憲法下の中央集権制(絶対主義国家)へ、という戦後派歴史学以来の通説や枠組みを現実可能にしていたテクノロジーについて、これまで、理論的な問いが欠けてはいなかったか。理論はいつもイデオロギーの構築や批判に向けられ、テクノロジーこそ「智慧」である」と喝破する福沢の奇妙な視座が、結局は欠けていたのではなかったか。そしてこの視座によって、イデオロギーの概念そのものが、実際に一変していた可能性は考慮に入れなくてもよかつたろうか。旅と移動という、ふたつの概念は、重なっている部分もあるとはいえ、厳密には区別できる。移動において、道は定められた起点と終点とに従属している。純粹な移動とは、デカルト座標上の点の位

置を表現するいくつかの数値の固定した変更にはかならない——奇怪なことに、純粹な移動は現象学的な移動を欠いているのである。逆に、純粹な旅においては、むしろ旅程がすべてであり、旅程にあることが旅を旅たらしめる(吉村元男によれば「日本のミチは、目的よりもプロセスをたいせつにする」という<sup>★71</sup>)。旅において、目的地はまだ見ぬ彼岸であり、出発地は離れて思う故郷である。到着した瞬間に旅は終わり、出発地に帰った瞬間に故郷は失われる。不思議なことだが、ひとは旅なしには、真に移動できないのである。本来の歴史の空間はあきらかに後者にあるはずだが、学者はそうした空間をあつかいたがらない。仮に移動を主題にしたとしても、出発地と到着地の記録を数え上げてそれで満足することがほとんどである。途上にある現象を統計データにするのは原理的に困難だからである。だから、たとえば学者のあつかう近代の移民とは、移動前の定住民であり、移動後の定住民である。つまり移動という現象は、「移民」という国家主体の統計可能な形式のなかに埋没し、あるいは隠蔽されているのである。明治天皇の臨幸地が千を越えた理由を説明するのは簡単である。彼が志士たちの夢を正確に聞き取って——海路を行くときは船を用いるが——、道を歩いたからである。すべてが鉄道であればそうはならない。鉄道における途上は、つねに——すでにテクノロジーに篡奪されている。テクノロジーは、旅に代えて観光を用意する……。

★72  
ガブリエル・タルドにしたがうなら、いくつか特徴的なテクノロジーをあげることができる——鉄道、電信、郵便、新聞。これに写

真も付け加えることができるだろう。これらは、ひとを人員に、自然の産物を物資に、言葉を言説にかえて、それらを遠く離れた目的地へと確実かつ瞬時に送り届ける。この確実さと瞬時の域こそ、国家である。この域にある都市はすべて国家に回収される。

文久三年（一八六三年）八月十七日の天誅組事件を知らせる書簡が、馬籠の庄屋大脇信興のところが届いている。

〔文久三年〕九月二日

京都そうどう手紙にてしらせ半兵衛より到来披見、右は左に——

同日苗木家中大坂より早追にて参り候につき、相尋ね候処、中川宮様御大将にて赤旗押立、禁裏百姓と號し、天誅組一番より百番まで旗相立、浪士はじめは二千人、追々相増し五千人の同勢、外に長州・肥後・有馬加勢にて公儀陣屋を潰し、大和・河内大騒動、紀州へも参り候よし、大坂へも向ふ様子に御座候。世の中さはがしく相成候間、居宅普請の儀も寛々と被成候やうに半兵衛より今朝申参り候。いづれにも大変之事に相成り候。<sup>★73</sup>

事件発生から十五日、これが、京都から馬籠までの《事情》伝達の距離である。慶応二年十二月二十五日の孝明天皇の死を庄屋が知ったのは、翌年の一月十日だった。やはり十五日かかった（ただし、庄屋は天皇の死を二十九日と把握していた）。

〔慶応三年〕一月十日——京都禁裏様、御年三十三歳程に相成り候<sup>★74</sup> 御死去被遊候。尤も去十二月二十九日と申事に承り申

当時もつとも整備された街道のひとつに沿って立つ宿駅にあつても、天皇の死でさえ、この有様である。しかも、庄屋の一族が京にいたという偶然が、事情を知ることが可能にしていた。

起伏は、なにも空間にだけ限定されるわけではない。時間にもまた、さまざまなテンポ起伏がありえた。地理的な条件のみならず、社会的な地位によつても、時間の過ぎ去り方は異なつてくる。テクノロジーが一変させるのは、こうした時空間である。日本における近代郵便制度の確立に果たした前島の役割はいうまでもない——東京の定飛脚屋総代佐々木荘介の訴えに対して、彼はこう答えて引き下がらせている——「内は凡そ人民の住んで居る地は、島嶼であらうが、山奥谷底であらうが、距離の遠近を問はず少額で且均一な料金を取めて、迅速に正確に音信を通ずる線路を開く、君たちにそれができるか、と。<sup>★75</sup>《情報》の伝達速度が、ひとびとの関心をひきはじめる。ニュース新聞の概念が形成される。「新しい読みもの」を意味する新聞の語が、未知のものを既知に変えるという質的差異をもたらす前近代的な意味よりも、知ることのいつ、その、早さという量的な意味に変化していく。知識の点でさまざまな濃度のありうる事情と異なり、もともと共有されることが前提の情報の課題

は、ある空間全体に均質に行き渡るまでの速度なのである。重要なことは、「何が」起きたのかではない。それが「いつ」起こったかだ。プロードルはいっていた。「贅沢な商品としてのニュースは同量の金よりも価値がある。……一五六〇年七月十四日、当時フランス宮廷でフェリーペ二世の大使であったシャントネーは、シャルトルからトレドまでの往復郵便を至急便で出す。この至急便は、合計一七九の宿駅を通り、三五八ドゥカートかかった（つまり一宿駅につき二ドゥカートである）。膨大な額であり、これはパドヴァ大学やサラマンカ大学の教授の年俸よりもずっと高い！」<sup>★76</sup>。あるいは明治期の新聞の売り子がいかに「特権」的であったか、お雇い外国人のひとり、デイヴィッド・リースはこんな感想を漏らしていた。

日本の首都の新聞売りは、目立つためにはどんな騒音をたてても誰からもとがめられないという特権をもっている。ちようどドイツの小都市の店先にかかっているドアベルと聞き紛うばかりの音をたてる鐘を腰につけた新聞売りのはしっこい小僧たちは、耳障りな音を響かせながら走り回り、ちよつと神経質な通行人なら、その单调な雑音が前や後ろから聞こえてきたりすると、それを避けるためにわざわざ遠回りをするほどである。路面電車や乗合バスの停車場で、かれらは車のあいだをぬって我が物顔に走り回りながら、辛抱強く我慢している乗客の耳に、ありとあらゆる新聞の名前をがなりたてる。「日日新聞 一銭」「毎日新聞 一銭」「朝日新聞 一銭」

## 「二六新聞 一銭」<sup>★77</sup>

しかし、知ることの速さとその均質さは、結局はある限界のなかで決定される。鉄道と電信である。言説、物資、人員はこれらのテクノロジーの限界に依存して成立しており、この限界に達した時点で、今度は折り返してその内部を均質化させる方向にむかう。街道のネットワークが、中心から等距離に拡がってゆく面的な領土に変化していくのである。

日本人ではじめて電信実験を成功させた（鶴丸城本丸―二ノ丸間およそ六〇〇メートル）島津斉彬の死については先に述べた。一八五八年八月二十四日のその死は、すでに上海の英国系新聞である十月十六日付けの *North China Herald* の知るところとなっていたし、一八六二年九月十四日に起きた生麦事件は、英国本国では十一月十七日の *The Times* 紙で報道され、あるいは事件当夜投函されたジョン・ニール公使代理の書簡は、蒸気船に乗って十一月二十七日に外務省に到着している。船便などを用い、およそ二カ月かけてロンドンに日本の情報は伝えられていたが、生麦事件から薩英戦争とつづく一連の出来事のなかで、英国議会、英国民は遠い日本に多大な注意を払っていた。ただこの時期は、一八五七年からつづくインド大反乱（かつてはセポイの乱といった）および英国王室によるインドの直接統治開始と重なっている。こちらのほうが大問題だった。五月十日、インド北部のメーラトで発生した大規模反乱について、ラクナウにいた *Henry Montgomery Lawrence* は、十六日にカルカッタ

のインド総督に向け、大急ぎでアジア中のヨーロッパ兵およびグルカ兵を反乱軍に差し向けるよう打電している。

All is quiet here but affairs are critical. Get every European you can from China, Ceylon, and elsewhere; also all the Gorkhas to the hills.  
Time is everything<sup>★62</sup>

「時がすべて」——この電報は二日後にカルカッタを出発、二十七日にボンベイに到着し、蒸気船でスエズに送られ、翌六月二十一日にアレクサンドリアに到着、二十六日の夜中にイタリアのトリエステに着き、そこから電信でロンドンに送られている。つまり最初の知らせから四十日以上かかった。この遅れは反乱を大規模化するのに十分だった。一八三七年のサミュエル・モールの電信実験以来、欧米では、主として先に発達していた鉄道網に沿う形で電信は急速に普及していたが、反乱以後、英国では大陸間を結ぶ電信網敷設の機運が高まることになる。六五年にはカラチーロンドン、七〇年にはボンベイーコンウォールを結ぶ電信線が開通し、陸路と海路の両方から英国とインドとが繋がった。翌七一年にはインドからシンガポール、ジャワを経てオーストラリアのダーウインが結ばれ、さらにシンガポールから香港を経て上海まで延伸している。電信は、文字通り、植民地に沿って世界中に伸びた。「大英帝国の手」<sup>★61</sup>である。すでに六一年には米国横断電信が開通していたし、六六年には大西洋横断海底ケーブルが敷設されていた。事故や交換手の気

まぐれは相変わらず問題になりえたとしても、それさえなければ、世界中の情報が瞬時に伝わる環境が生まれたのである。

日本も遅れてはいなかった。一八六九年に東京―横浜間で電報の取り扱いが開始されているが、その二年後には和文モールス符号を策定、諸外国との電報送受信を開始している。長崎から上海、ウラジオストクへ通じるケーブルによって、世界の電信網完成とほとんど時を同じくして、これに接続したのである。七三年には東京―長崎間に陸上電信線が開通し、七八年には電信線の国内整備をほぼ完了している（なお東京―大阪間長距離電話開通は一八九九年である）。こうしたテクノロジは歴史にどのような変化をもたらすのか。

たとえば開通したばかりの東海道線の新橋―神戸間の所要時間は二十時間五分である。江戸時代のひとびとが東海道を二週間前後で踏破したことに比べて、たんに迅速化しただけと考えては不十分である。「屋形より外輪を視候処、飛鳥之如にて、一向見る間無御座候」（『中浜万次郎等漂流始末書』）といった中浜万次郎のような驚きが必要である。つまり、なにか別のことが起こっている。

鉄道網や電信網の形成は、もとあつた歴史的な都市のネットワークをなぞるように形成される。またトンネルや鉄橋は、それまでありえなかった接続路を形成し、思わぬところが開通したり、別の都市を可能にし、あるいは不可能にする。その点で、これが生成し、拡張をつづけるあいだは、国家ではなく都市に貢献するようにみえる。テクノロジは都市的な回路を通じて伝播するのだから、鉄道や電信線の開鑿それ自体が、未踏の地をゆくひとつの冒険や旅であ

りうる。問題は、この拡張が歴史的かつ現実的な（工学的・経済的・政治的……）限界に達して終息するときである。そのときおそらく、四つの変化が歴史に生じる。

ひとつめは、この限界が、否応無しに国境を形成してしまうことである。かつて険しい山河がひとつの国家のなかにさえ、いくつも形成していた国境線をテクノロジーが抹消するかわりに、一日に一度の燃料供給でどこまでどれほどの内容物を移送できるか、という主題が新しい国境を形成するようになる。事後的には、アブリオリに存在する政治的国境の内部で鉄道が敷設されるようにみえる。だが実際には逆である。テクノロジーのほうが国境を形成しているのであり、以後、鉄道や電信の敷設と植民地の獲得は同時に生じるようになる。後述するが、テクノロジーは最終的には、かならず都市ではなく国家に貢献する。

しかし、重要なのは国境という外延だけではない。内部が均質な空間に変わるとい点にも注目できる。鉄道や電信は、なにより、山河の起伏を無視した、首都を座標軸の原点とする、ユークリッド空間に似た均質空間を形成する。だから依然として東京―京都間の物理的な距離は変わらずとも、歴史的な距離の概念は一挙に変質する。たとえば中山道なら男性で二週間の距離だとしても、女性で二十日以上かかり、天候が悪ければ男女を問わず一ヶ月を優に越えてしまうとしたら、多様な歩く人間により形成される空間において、均質な距離の概念はひとびとの生活基準として役に立たない。

だが鉄道は、内容物の個性を完全に無視する。誰がどれほど中心

から遠く離れていても、中心からの到着時間あるいは輸送時間という、同じ物差しで測定されうる時空間が創出される。逆にさまざまな場所にいる人間のほうが、この物差しにあわせて行動しさえすればよい。列車到着の遅れた時点からまた時間を計りなおすことを、近代社会は許容せざるをえないほどに、テクノロジーが、われわれを絶対主義的に用立てている。頭上に君臨するのは、時間＝時刻表だけではない。ひとは鉄道のために山を削り、河に橋を架け、海を埋め立てる。第一公準。点と点のあいだに直線を引くことができる……。科学がまだ慎ましく学問のなかにとどめている均質なユークリッド空間を、テクノロジーは現実を作り出してしまふ。テクノロジーの夢は、すべてを平野にすることなのだ。

ふたつめは、時空間の変質から自動的に生じる《情報》概念の形成である。地理空間につきものの起伏や気候変動、主体の多様な差異といった諸々の要素と結びつかない絶対的な時空間を觀念としてではなく、現実形成してしまうテクノロジーの力は、その内容物である物、人、言葉を、それぞれ物資、人員、言説に、ひきくるめていえば《情報》に変えてしまふ。電信線に沿って周縁から中心に情報が伝わるや、今度は鉄道に沿って新聞や手紙が限なく周縁に配達され、一定の範囲で均衡する、統一された客観的知見が情報として共有される。むろん、周縁にいけばいくほど情報伝達の遅延が発生する。この「遅延」が、近代において問題視される、そして実際には偽の対立にすぎない中心―周縁の二項対立を構成する根本的條件である。だが、地方の遅延が問題視されればされるほど、この構



造と真に対立している都市的ネットワークは隠蔽され、都市ごとの多様性は消失していく。ある情報が特定の場所に役立つかどうかという問いは時代遅れであるばかりか概念の誤用である。ひとは均等に情報を必要としているのであり、情報にとって問題なのは、延々と等間隔に浴している絶対的時間だけなのである。「新聞が人々の会話を、豊富にすると同時に均一化し、空間的には統一し、時間的には多様化し、その形を変えてしまったことは想像も及ばぬほどである。新聞を読まぬ人たちの会話すらこの例外ではない。自分が読まなくても読む人々と話をとりかわす結果、その借り物の紋切型の思考に追従せざるを得なくなってしまう。百万の舌を動かすには一本のペンで足りる」<sup>★84</sup>。かつてカルヴァンがデル・ヴィーコにいった、「……私の手紙がどれほど長い間途中にあるかと考えると、義務を果たすことに何度もどれほど長い間途中でいなくなったか」という《途上の恐怖》は無用のものとなる。むしろここにあるのは、《途上の不在》あるいは《隠蔽》であり、《途上》のかわりに絶対的時間空間の現象的モデルである条理化された平野がひとびとの脳裏にも現実にも形成されている。こうしたグリッドに依拠する情報概念は、われわれが思っているほど中立の概念ではないのである。

みつづめは、テクノロジーによって都市が国家に捕らえられてしまうことである。鉄道や電信で網羅的に接続された情報空間のなかで、特定の起伏ある地理空間に密着していた諸都市の差異は、すべて情報量の格差として、あるいは「発展」の度合いとして、一律に再配置される。たとえば近代都市の指標として、移動をとまなうひ

との集中ではなく人口が主要な一項目を占めること自体、歴史学者に誤解をもたらしているだけでなく、統計データのなかに都市が埋没し、都市の定義がたんなる国家行政上の数値決定に墮落していることを意味している。近代のテクノロジーが行き渡っているかぎり、すべての都市は、潜在的には東京のクローンであるか、あるいはそれを目指す。つまり武装集団を含む自治組織、独自のマーケット、あるいはマンフォードが指摘していた「容器」性といった、元来都市を都市たらしめていた要素は次々に失われていく。むしろ例外はある。炭鉱、鉄鉱など埋蔵資源を有する土地の近傍にできる都市である。この場合には、地理的な特殊条件に密着して存立する。だがそれでも、労働者や資源を輸送する鉄道網の集中する場所に形成されるのが通例である。このことは、鉱石と燃料とが確保される地点に冶金術の専門家が集中していた前近代の都市（たとえば江戸時代、石見銀山と瀬戸内海航路とをつなぐ宿場町であった備後の天領、上下町は、金融業の発達もみられるなど、都市の一面を覗かせていた）が、予示していたことだが<sup>★85</sup>、いずれにしても、都市と都市とが鉄道によってつながれるのではなく、むしろ鉄道に沿って都市が形成あるいは拡大されるという逆転が生じる。

しかも、近代のテクノロジーを利用するのは、都市ではなく国家である。知的でありさえすれば保持可能なイデオロギーと異なり、相対的に熟練を必要とするテクノロジーにとって、都市の発明になる任期つきの公職は用をなさない。かつてヴェーバーがいつたように、専門的訓練と恒久性とが要求される技術の使用において、

皇帝の手足であり「ファラオの奴隸」であるかぎり持続性をもつた、官僚の手に委ねられざるをえないのである（よくいわれるように、古代ローマが都市から帝国へと変貌を遂げるためには、壮麗な上下水道インフラストラクチャーで各都市をつなぐ技術テクノロジー・官僚の存在が不可欠だった。ましてや、ある地理条件の内部における大規模かつ網羅的な浸透を都市が欲望することはありえない以上、必然的に、これら近代技術の利用は一義的には国家の手に委ねられてしまう。

ところでヴェーバーは、「近代的団体形式の発展」を、「官僚制的行政の発展や不断の増大」と同一視していた★87。こうした増大によって、官僚制の手になる「近代都市」が生まれ、唯一の原理からなる合理的社会秩序——すなわち国家的秩序——の形成を促していたことは、ただちに理解される。だが、それは都市の形成というよりは、国家による諸都市の一掃というべきではないだろうか。もちろん、これを、マンフォードやヴェーバーのように、「伝統都市」から「産業都市」への移行と表現することはできる。だが、われわれが重視しているのは、都市は諸都市のネットワークだということであり、現象としての一都市は《道》の入り口や出口、あるいは中継点にすぎないということである。「もともと昔は鉱山だけに限られていた鉱山の環境が一八三〇年代以来、鉄道の普及のためにどこへでも広がった。つまり鉄のレールの行くところはどこでも、鉱山とその肩の山とがつき従っていた」★88。こうした単調さ、没個性は、都市が諸都市であることを事実上、不可能にする——一種の首都主義ヘトリズムがある。十九世紀以降の西欧や日本にみられる、その他の都市を不可能にす

るほどの首都への過剰な人口集中は、「近代都市」の特性というより、任意の点から放射状に拡大する近代のテクノロジの特性と軌を一にしているものであり、テクノロジがなにより《道》を文字通り網羅したことにより、マンフォードが都市の発展と衰退の輪廻の最後に位置づけた死の都市ネクロポリスとなる以前に、都市は見かけだけを残してその中核部分を喪失している。「都市はつねに都市である」という、ブローデルの言葉★90が未来にも正しいという保証はどこにもない。

この点で重要なのは、ヴェーバーの次のような指摘である。「官僚制的行政の精確さは、鉄道、電報、電話を必要とし、しだいにそれらに拘束されてゆく趨勢にある」★91。たしかに、彼によれば、もつとも合理的な支配体制である官僚制にとつて、技術はなくてはならない「条件」である。だが、官僚制をめぐる彼の批判的記述の背後で、テクノロジは、もつと隠微で不穏な響きを奏でていたように思える。近代のテクノロジは、おそらくそこにはとどまっていない。むしろテクノロジのほうが、疑似ユークリッド的合理性を拡散するためのいくつかの推進器のひとつとして、官僚制を利用する——官僚は、巨大な技術システムのなかの一機構なのだ。というのも、もし官僚の側に主体があるなら、第二次世界大戦期の総力戦体制、あるいは核兵器のもたらした冷戦期の超大国がそうであったように★92（むしろヴェーバーには知る由もないことだが）、官僚機構の存続が不可能になるような過剰な合理性の推進を官僚自身に要求するケースが存在することを説明できないからである。海底炭田を有したかつての端島（軍艦島）がそうだったように、テクノロジを駆動

させる燃料や材料を産出する場所、あるいは巨大な発電所の周囲に例外的に新たに都市が形成されるということ自体、すでに都市がテクノロジーの従属下にあることを意味している。

ベルナル・ステイグレルは次のように指摘していた。

現代の技術とともに、一般的な図式の反転が起きる。つまり技術革新は、もはや発明から生じるのではなく、発明を誘発することを目論んだ一般的なプロセスとして、その発生をプログラムするのである。：現代の技術を特徴づける、応用にかかる時間の短縮：によって技術的発明と科学的発見が混同されるようになった。研究の方向が、産業上の目的に大きく左右されるようになったのだ。<sup>★93</sup>

つまり、テクノロジーが官僚のもつ専門知の發揮に役立てられるのでもなければ、その逆に専門知がテクノロジーの利用に役立てられるのでもない。そうではなくて、知のほうが、あらかじめテクノロジーにより方向付けられていて、知はテクノロジーの命法——いわゆる「技術傾向」<sup>★94</sup>にしたがう。ステイグレルの意見を信用するなら、近代の技術官僚を、ヴェーバーのように純粋な専門知にもとづく集団と考えるのは困難になる。知は、意識してか無意識にか、それ自身は向かう方向に関心をもたないテクノロジーによって、つねに——すでに、方向付けられているからである。

その点では、ヴェーバーは近代技術の「迅速さ」を指摘してはい

ても、依然その原理はまだ前近代にこそふさわしいやり方でしか特徴づけられていない。むしろ近代の人々が望むもつとも合理的な体制とは、官僚をさえ一掃し、純粋なテクノロジーが完全にそれにとつてかわる支配なき体制である。近代という時間がある期間で眺めるなら、近代はおそらくそこに向かつて伸びる不毛な線分にみえる。

つまりこれは、社会学の課題というより、歴史や哲学、さなければ文学の課題なのだ。すなわち、無人機の飛び交う空と、地上における人間の不在あるいは消滅……。

よつつめは、《旅》の喪失である。いいかえれば、先に定義した、移動なき純粋な移動の実現である。そこにあるのは出発地と到着地だけであつて、座標空間上の数値の規則正しい変動——車輪と軌条<sup>レール</sup>のつくる機械的なりズム、駅名標以外の差異をもたない駅舎での定期的な停留——のほかに、汗や泥、風雨や砂埃、履物や杖の損耗、筋肉の疲労や針路喪失、靴擦れや捻挫、遭難や行き倒れなど、移動につきものの現象学的な痕跡は存在しない。つまり身体的に移動しているにもかかわらず、身体的にすこしも移動していないという矛盾した事態を、テクノロジーは実現してしまう。

その結果、ひとはまったく動かないにもかかわらず、どこへ行くことも可能な、自由の権利を手にする。その点では、実際に移動する、いいかえれば権利なしに、自由に活動する、前近代の民衆とは決定的に異なる。移動する身体を欠いていながら、その一方で、統計学の対象という意味では、物的かつ科学的かつ客観的に存在する、《公衆》が形成される。タルドは、かつて、こうした《公衆》を、前近代以

来の《群衆》の肉体的性（たとえばデモやストライキは、群衆の活動に属する）と対比させて、精神的なものと論じていた。<sup>★95</sup> 公衆の存在を浮き彫りにする統計そのものが、対象をなにか別種のものに作りかえていることに、彼は自覚的だったのである。だが、この対比は誤解を生む。というのは、にもかかわらず、《公衆》は精神的Ⅱ主観的ではなく、むしろ物理的に作用するからである。彼らは移動しない。その場にいながらにして、つまり投票所にさえいかずに、彼らは国政に現実かつ不断に参与する。

同時に、前近代と同じように、ふたたび不動の玉座Ⅱ首都が形成される。ただし、前近代のそれとの決定的な差異は、不動であるにもかかわらず、いたるところに存在しうることである。かつての畿内のように関東を新たな「畿内」<sup>★96</sup>として設定し、明治政府の具体的統治範囲を限定する企図は必要なかった。鉄道と電信とがありさえすれば、東京という中心と、東京がいつでも転移可能なそれ以外の場というだけで、充分だったのである。「広く会議ヲ興シ万機公論ニ決スヘシ」。「上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フヘシ」（五箇条の御誓文）……。明治天皇や志士たちの描いた夢は、彼らを裏切る形で実現していく。強力なのは《公衆》なのか、《不動の玉座》なのか、という問いは、近代内部での問いではありえても、近代そのものを問う問いではありえない。むしろ、支配、被支配にかかわらず、不動性と遍在性とを同時に実現したことが、近代の意味である。不動の公衆と不動の玉座——その結合が、国民国家の誕生を意味し、おそらくは主権国家の形成を意味する。この結合の主語は、支配層で

も被支配層でもない。誰であろう、テクノロジーである。以降の考察は、章をあらためて進めることにしよう。

### 結論 神話の再生——近代国民国家の誕生

われわれは、歴史的にいえば、誰の所有物でもない土地をわがものにしようとするとき、二つのやり方で権利を主張してきた。ひとつは、誰よりも早くその土地に身体ごと到着すること。もうひとつは、自分の名を記した槍を土地に投げ入れておくことである。これは唯名論と实在論、経験論と合理論という、古典的二者択一にも示されているものだが、同じように、ひとは二つのやり方で空間を認識する。ひとつは、実際に身体を移動させることにより、その軌跡に沿って獲得される空間認識。もうひとつは、固定した身体を中心に同心円状に拡がりながら、中心に近いほど色濃く、遠ざかるにつれて減衰していき、最後には地平線上に消え去る空間認識である。前者は触覚によって覚知される物質的な空間であり、後者は視覚や聴覚によって生み出される《像》<sup>★97</sup>にもとづく空間である。ルロワⅡグーランは前者を「巡回空間」、後者を「放射空間」と名づけていた。<sup>★97</sup> 厳密さを欠いた物言い許されるなら、前者は都市や旅に、後者は国家や統治に対応する空間認識だが、ふつうは国家と都市とが混在しているように、空間認識も混在している。

だが、近代国民国家の本質は、この当然の混在を否定することにあり。といつても、区別するのではない。その反対に、空間を占め

るあらゆる点のひとつひとつにおいて、統治の空間によって旅の空間を完全に取り込むのである。空間のどこにいても、中心にいるのと同じ《情報》が等しく得られ、また移動したとしても、ほとんどの場合、中心からの距離にしたがつて生じる《情報》伝達の遅延、すなわち統治の空間に在る場合と同程度の意味しかもたなくなる。

いいかえれば、移動せずにはあらゆる場所に存在し、また移動しながらいつも同じ場所にいる。道程こそその本質だった旅は消滅し、道程の終わりからはじまる観光がひとつとの関心を引くようになる。

だから、鉄道草創期に都市のいたるところで「鉄道忌避」があったという信じられてきた議論は、理由のないことではない。こうした情報伝達のあり方は、商人資本を不可能にし、都市の特質をなしてきたマーケットを消滅させるからである——資本主義繁栄の条件

は、ブローデルが指摘したように、あきらかに反市場主義にある。アンチマーケット

《諸》都市の喪失——都市ごとのマーケットは消滅する。お互いに顔を見て、会話を交わすことのできる場所で形成された、「都市の愛国心」は消滅するか、意味をうしなう。具体的な形象を捨て去ることで一般化したネーションワイドな市場と、動かない民たちの「領土の愛国心」とが、それらにかわつて君臨する。★99

こうした空間が、たんにイデオロギーによって形成されることはなく、またたんに暴力によつて形成されることもない。それを実現するテクノロジーなしには不可能である。旅から観光へ、マーケットからキャピタリズムへ。それは、ひとつとの交通の顕在化が可能にした革命を、テクノロジーが纂奪したことの証である。

ひとは「日本」の語にどのような意味を付与してきただろうか。

たとえば「日出処」という表現は、もちろん中国との対比でできたものである。これについて提示された最近の学説——たんに方向を意味するものであり、政治的な意図はない、という意見は正しいだろうか。そういうためには、「処」という語の意味を無視できない

なければならない。というのは、この語はあくまで場トポスを意味しているからである。じつのところ、方角が場所という概念から完全に分離されるためには、世界が球体をなし、太陽は世界のどこかの場から昇ってくるのではないことが意識されていなければならない。日本の場合でいえば、ペリーという西洋人が極東のさらに東からやってきたときにはじめて、方角は場の概念から切り離されて相対化されたのである（といつても、アメリカ中心にもかかわらず「極東、国際

軍事裁判」といわれた事例、あるいは「東西冷戦」「南北問題」があるように、依然として、方角の概念は歴史性を帯びている。だから、前近代の方角について、自分の立っている場所を起点に太陽の昇る側を東といい、沈む側を西という、純粹に統治空間上の非歴史的概念としてのみ考えるのは無理がある。むしろ、風水（四神相応）が典型であるように、方角にはそれぞれに意味があり、また東にはエデンが、西には浄土がある空間こそ前近代の空間であつて、

たんに統治空間上の概念と近代人が考へる以上の意味を方角に認めたいほうがいい。つまり、陽の昇る場所は、世界の何処かにあり、したがつて旅の可能性を有している。だから、「日出処」という表現が、たとえ方角をしか意味していなかったとしても、中国という不動の

玉座を中心とする統治空間的な世界観に対して、批判的に旅の空間上の東西という場の概念を持ち込んだものの可能性は十分にある。

「日本」の語は、近代以降そうであるように、列島域の一部を占める国家を名指す、独立した固有名だったわけではなかった。歴史的

に限られたある時空のなかで、中国という唯一最大の帝国を陽の沈む側に見出す地理条件が、この名をもたらししたのであり、それは文字通り、東を意味すると同時に、陽の昇る場所を意味する語だった。

問題は、避けられない地理条件のため、日本という国家をひとつの単位としてみる場合、致命的に統治空間を欠いていたことである。地平線という限界まで統治空間が拡がる前に、いつも山や海がそれを遮ってきた。神話の時代の素戔嗚尊はもとより、倭姫命から日本武尊、倭迹迹日百襲媛命によって派遣された四道將軍にいたるまで、異質な諸空間を旅する人物なしには、「日本」という単位は見出されてこなかった。共通点ではなく、異なる諸世界を知った旅人だけに可能な不等式が、「日本」を成立させてきたのである。

近代以前、もつとも広範に移動した為政者のひとりであり、移動速度にまつわるいくつかの伝説をもつ豊臣秀吉は、「ひのもと」の語を次のように使用していた。「小たわらの事は、くわんとう、ひのもとまでのおきめにて候まま、ほしころしに申つく可候間……」(『浅野家文書』。「関東、出羽、奥州、日の本迄、諸卒悉罷立候……」(『浅野家文書』)。すなわち、「ひのもと」は蝦夷を意味している——近江商人にとつての「日下」がそうだったように。中世のひとつの意識のなかで、国土の北限は佐渡とされ、東端は陸奥や蝦夷とされ

たが、<sup>★101</sup>「ひのもと」なる語が場と方角とを同時に含むことに同意できるなら、蝦夷がそう呼ばれることに不思議はない。また逆に、次の石川啄木の詩の意味も、容易に理解される。

東海の小島の磯の白砂に われ泣きぬれて 蟹とたはむる<sup>★102</sup>

「東海」は函館と陸奥を結ぶどこかの海だが、同時に日本の周囲に広がるすべての海でもある。つまり「小島」は日本をも意味しうる。だから、大石直正、入間田宣夫らの指摘を敷衍すれば、前近代の「日本」は東にむかつて無限に遠ざかっていく場所だが、それ以上に、移動する民だけに知られる諸差異の帰納的総合によって《発見》されるということ——同一性にもとづくのではなく、差異が異世界を結ぶのである。それが明治天皇の行幸の意味であり、大久保ら志士たちの意図だった。このことは、戦前のナショナリズムに理論的根拠を与えた数々のイデオロギーが、定住農耕民を抱えた北朝側ではなく、海民山民という移動民に支えられた南朝側から生まれたことの理由の一端を、うまく説明してくれる。その意味では、こうした「日本」意識を、網野のように、「神国」などといった、なんらかの超越論的前提にもとづく虚構といいきるのは無理がある。「日本」は、唯一の中心から同心円状に拡がる、したがって国家にふさわしい均質な統治空間上の概念というより、あくまで異質な空間をつなげる旅の空間上の概念だったのである。

日本に統治空間がなかったわけではない。細分化された近世領国

においては、城郭建築は放射的な統治空間を確立しえたが、より広範囲にそれを求めるなら、多くの場合、山頂から見下ろされる風景に見出されてきた。だから、日本の為政者は、統治空間を獲得するために、山岳信仰を必要とした。また、実態を無視してモデルとしていえば、旧仏教は、比叡山や高野山といった山頂を占めることによって、旅の空間を行くのとちがった形で、きわめて広範に信者を獲得することができた（それに対して新仏教は旅の空間との親和性の高さを示すだろう）。このことは、なにを意味しているだろうか。国家創設の古い神話を参照しておこう。

故、大國主神、出雲の御大の御前に坐す時、波の穗より天の羅摩船に乗りて、鵝の皮を内剝に剥ぎて衣服に為て、歸り來る神有りき。爾に其の名を問はせども答へず、且所從の諸神に問はせども、皆「知らず。」と白しき。爾に多邇具久白言しつらく、「此は久延毘古ぞ必ず知りつらむ。」とまをしつれば、即ち久延毘古を召して問はす時に、「此は神産巢日神の御子、少名毘古那神ぞ。」と答へ白しき。故爾に神産巢日御祖命に白し上げたまへば、答へ告りたまひしく、「此は實に我が子ぞ。子の中に、我が手僕より久岐斯子ぞ。故、汝葦原色許男命と兄弟となりて、其の國を作り堅めよ。」とのりたまひき。故、爾れより、大穴牟遲と少名毘古那と、二柱の神相並ばして、此の國を作り堅めたまひき。然て後は、其の少名毘古那の神は、常世國に度りましき。故、其少名毘古那の神を顯はし白せし謂

はゆる久延毘古は、今者に山田の曾富藤といふぞ。此の神は、足は行かねども、盡に天の下の事を知れる神なり。<sup>★105</sup>

海の向こうから奇妙な格好でやってきた少名毘古那（少彦名）は、農耕、医薬、酒造、石器などを司る技術の神である。誰もその名を知らなかったこの神は、その場にながらにしてすべてを知る久延毘古（かかし）によって名指され、大國主の国造りに協力することになる。「かかし」である久延毘古を放射状にひろがる統治空間の神格化とみれば、神話の意味は明瞭である。都市的な回路を旅してきたテクノロジーの国家（大國主）による捕捉である。

「足は行かねども、盡に天の下の事を知れる」ということは、「かかし」を固定している、ある空間上の一点とほかのすべての点が均質であることを意味している。ローマ帝国内に張り巡らされた上下水道が、いながらに水を得て、いながらに排水する動かない自由を与えたように、「かかし」は不動にして遍在する。だから、奇妙なことに、明治国家建設に際して起きた統治空間と旅の空間の結合と同じ出来事が、国家創造の神話においても反復されている。

しかし、しばらくして少名毘古那は常世國に去ってしまう。テクノロジーは国家の枠に縛られたりしないのだ。そのとき、ひとり残された大國主はどうしたか。

是に大國主神、愁ひて告りたまひしく、「吾獨して何にか能く此の國を得作らむ。孰れの神と吾と、能く此の國を相作らむ

や。」是の時に海を光して依り来る神ありき。其の神の言いたまひしく、「能く我が前を治めば、吾能く共與に相作り成さむ。若し然らずば、國成り難けむ。」とのりたまひき。爾に大國主の神曰ししく、「然らば治め奉るは奈何にぞ。」「吾をば倭の青垣の東の山の上に伊都岐奉れ。」と答へ言りたまひき。此は御諸山の上に坐す神なり。<sup>★106</sup>

テクノロジーの不在を、不動の御諸山（三輪山）を中心とする山岳信仰によって代えたのである。このことは、国家全体を均質な統治空間のなかに収めるにはあまりに貧弱だった当時の技術的限界と、それを補うに山頂に鎮座する大物主という神のイメージ/イデオロギーを用いるほかなかったことを意味している。ネットワークから中心-周縁図式への転換——不動の玉座Ⅱ座標軸の原点としての、大和（三輪山）——ここに首都の概念が生まれたのだ。

むろん、これは有名な神話の可能な一解釈にすぎない。だが、時の権力者が技術の粋をつくして築いたかかしてである、古代の国分寺や近世城郭を用いても、統治空間はかぎられ、土地が必然的に諸空間に分割されたのは歴史にあきらかである。したがって、統治空間上の概念として「日本」がありうるとしたら、以下のような形しかない。すなわち、《想像の共同体》<sup>イマジナリ・コミュニティ</sup>である。決定的なことに、むしろ前近代においてこそ、そうだったのである。なぜ、この概念が近代に適用されるという、不可解な逆転が生じたしまったのか。

柄谷行人はアンダーソンの国民国家論を参照してこういつていた。

注目すべきことは、一八世紀後半のヨーロッパに、アンダーソンがいうような「想像された共同体」が形成されただけではなく、まさに「想像力」そのものが特殊な意義をおびて出現したということです。ネーションが成立するのと、哲学史において想像力が、感性と悟性（知性）を媒介するような地位におかれるのとは同じ時期です。それまでの哲学史において、感性はいつも知性の下位におかれていましたが、想像力も、知覚の擬似的な再現能力、あるいは恣意的な空想能力として低く見られていました。ところが、この時期はじめて、カントが想像力を、感性と知性を媒介するもの、あるいは知性を先取りする創造的能力として見いだしたのです。…ネーションの感情が形成されると、想像力の地位が高まるのとは、歴史的に平行した事態です。<sup>★107</sup>

柄谷は、ネーションの成立と想像力の概念の哲学的登場との並行性を指摘する。そして、こうつづける。

カントの考えでは、感性と悟性は、想像力によって総合されます。しかし、いいかえると、それは、感性と悟性は想像的にしか総合されないといいことです。…ところが、カント以後のロマン派哲学者においては、感性と悟性はもともと総合されていると考えられるようになります。<sup>★108</sup>



カントが批判的に提示した想像力 *Einbildungskraft* は、十九世紀のロマン派哲学者によってたんに肯定されて、感性（現実の感覚世界）と悟性（知）との結合が前提となり、あるいはヘーゲルのように現実と理念とが統一されて想像力が忘却され、ネーションとステートの結合、すなわち国民国家が形成されたというのである。<sup>★109</sup>

たしかに、カントのいうように、現実の立方体を「立方体」として総合するとき、感覚世界には映っていない側面や裏面を記憶から呼び出し、感覚世界に生じている表面と結合させる想像力という抽象的な力が必要になると思われる。だが、ならばその「立方体」は実在、あるいは「物自体」とは無関係せず、たんに「想像された *imagined*」ものと考えるべきなのだろうか。

ネーション成立と想像力の地位上昇との同時性が、仮に事実だとしても、それでネーションの成立を現実証明することにはならない。両者がほんとうに結びついているとしたら、ネーションが頭のみで構成されたものにすぎず、実在とは無関係であることを示すだけである。要するに、想像されたものは、想像力によって生まれるという同語反復にすぎない。だからこの種の議論をいくら繰り返しても、現実の歴史を云々することにはならないし、ときおり振るわれる、想像力の欠片もない国家的暴力を目の当たりにして驚愕するしかなくなる。カントのように意識的にか、ロマン派哲学者のように無意識にかにちがいはあれ、やっていることは、実在の世界をたえず手の届かぬ場所へ送り返して観念の世界を拡大しているだけだ

ある。つまり歴史はすべて頭のなかで構成されたものだという、これ自体も証明不能の命題にたどりつく以外に、この議論は行き先がない。だから次の問いは不明なままで——じつのところ、近代にはなにが起こっているのか。近代とはどういう時代なのか。

ほんとうに、現実の世界と知の世界とは想像力によって総合されるのだろうか。ある立方体を作り上げる設計図と材料とがあつたとき、これを現実に可能にするのは想像力だろうか。ちがう。手や道具、機械である。科学者の理論を現実のものとして証明する手だては想像力だろうか。ちがう。実験であり、実験装置である。要するに、はるか昔から人間という種族につきまとい、近代にいたつて合理主義や実証主義の衣をまとつたテクノロジが、悟性と感性の世界をつないできたのである。あえてカントに好意的にいえば、彼が *Einbildungskraft* という語に込めた工学的な意味は、想像された *imagined* ものという表現のなかで霧散している。

十八世紀のカントが、鉄と蒸気機関、ダイナマイトと電気からなる十九世紀の産業革命を知らなかつたのは当然だが、人間は、そも与えられた感覚を像として頭のなかで（再）構成するだけの受動的存在ではない。人間は立方体を、たえず死角をつくる眼だけでなく、回折可能な手によつても知覚する。手を用いて頭のなかの像を具現化する積極的な芸術／技術にまつわる能力ももちあわせている——というよりむしろ、人間は頭で思考しているだけではなく、手で思考してもいる。その意味では、「国民」は、多くの場合、頭ではなく手で思考する存在と考えたほうがいいし、じつは歴史はそうやっ

て作られてきたと考えるしかないのである。カントがあくまで超越論的に措定したつもりでいた、絶対的な空間や時間は、テクノロジーによって——重機の開鑿する土地の平坦さによって、等間隔に刻まれた列車の時刻表や学校の時間割によって——擬似的かつ実際に形成されている。想像力の産物であるかないか、その力を意識しているか忘れているかは問題にならない。これは現実なのだ。

だから、多くの文明において、技術を担う集団ではなくイデオロギーを担う集団に高い地位が与えられてきた歴史の伝統を逆転させて、マルクスが下部構造としての生産様式の変化、技術革新に歴史の原動力をみたとき、はじめて近代国民国家は現実には歴史の対象となりえた。と同時に、マルクス主義者の思考する歴史そのものが、技術革新の内部に取り込まれて身動きできなくなったのである。「唯物史観」が世界を上部構造と下部構造とに分割し、後者のねじれた優位性を語る時、感性（現実）と悟性（人間精神）とをつなぐものはなにかという、歴史の真の主題は失われるからである。

問題は、われわれが思っているよりも、ずっと複雑である。現実への介入を可能にする手（現場／臨床）の思考は、その意味で積極的であるにもかかわらず、道具は手の代わりをし、そればかりか機械装置を伴動させるための一部品として手を組み込んでしまう。こうして近代のテクノロジーは、かつての職人の手仕事と異なつて、おのれを人間から不可視にする。寸断された工程から完成品を認識するに、想像力に頼るほかなくなる。ここから、製品を生み出すのは手ではなく想像力であるという必然的な誤解が生じる。だが、は

たしてその想像はおのれの内部にある抽象的な力——ときに文学的な力とみなされてきた想像力が生み出したものだったろうか。その想像でさえ、鉄道や電信、写真や新聞といった近代のテクノロジーが生産したのではなかったか。鉄道はひとを諸々の特産品と同じように貨物としてあつかい、新聞はひとの死を明日の天候と同じように情報としてあつかう。こうしてひとは能数化され、外見上の差異にかかわらず「国民」となる。テクノロジーそれ自体は、けつして生産物そのものではないし、唯物論的なものではありえない。またその一方で、人間の悟性に従属する内的で観念的なものでもない。むしろ両者をつなぐと思われてきた想像力からその地位を篡奪し、結果的にそれをあつかう国家に軟体動物的な見かけを与えるものである。だから国家についての唯物論的な議論も観念的な議論も一面的には正しく映るようになる。しかし、近代国民国家は、両者をつなぐテクノロジーによって形成された、作為とも自然ともいえぬ独特な場を占めている。多くの知識人がこの場を見過ごして、人間の抽象的な力や暴力の独占に国家の根源をみていたことは、畢竟、事態の深刻さをあらわしているというほかない。あのブローデルが、次のようにいつていたことが思い返される。「技術なるものは人類史の厚みいっぱいに広がっている。それゆえ、技術の専門家であるうとする歴史家にとつても、技術を完全に自家菜籠中のものとすることはほとんどまったく不可能なのである」<sup>★</sup>。

そこから、次のことが理解される。近代のイデオロギーは、前近代のそれよりずっと慎ましいことだ。かつてのようにテクノロジー

を使役するのではなく、その君臨を隠蔽するはたらきを担う（それはときに表<sup>リアプレゼンション</sup>象といわれる）。依然としてイデオロギーを上部構造に据えつけたマルクス主義は、それ自体もイデオロギーである。「唯物論」の語を用いることで、テクノロジーを隠していた。それと同じように、知識人が近代の農本主義イデオロギーを批判的に指摘することそれ自体も、イデオロギーである。というのは、農業がじつはテクノロジーの産物であることを、その言い方でもっと巧妙に隠蔽しているからである。詩人宮沢賢治のような希有な例外を除いて、それを自覚していた知識人はすくない。そして国民国家論が行なったのも、やはり同じである。それがあたかも人間自身の精神によってつくられるかのような「想像」の語で、その存在を隠していた。実際にはリアプレゼンションにすぎないイデオロギーを、国家の中心とみなしたために、「想像の共同体」概念を近代に適用する、致命的な過ちを犯したのである。国民国家論もまた、イデオロギーだった。だから知識人が、いたるところにイデオロギーを指摘し、非難するたび、当のそのことによつて、テクノロジーはひとの目から遠ざけられ、過小評価される。それどころかイデオロギーとは無縁の中立的なものとさえ、意識されてきたのである。そこに、直立二足歩行のおかげで、大脳と手を同時に実現した、人間<sup>ホモサピエンス</sup>という種族の本質の半分が、示されているにもかかわらず、テクノロジーについての批判的な眼差しなしに、イデオロギーの悪しき連鎖を抜け出して現実に触れることは、それほど簡単ではない。

例えば、国民国家の枠組みをはるかに超える大戦後の冷戦構造は、

自由主義や社会主義のイデオロギーがもたらす喧騒の背後で、原子力にまつわるテクノロジー——すなわち、国境などものともせず世界のいたるところを巡回する不可視の原子力潜水艦と、地球上のあらゆる地点に同じ破壊をもたらす大陸間弾道ミサイルという、統治の空間の地球大の拡張が生み出した結果ではなかったか。

第二次世界大戦前のハイデガーを苦しめたのは、道具連鎖の概念を駆使して積極的に産業社会に参与すればするほど、かえつてテクノロジーに実存を奪われてしまうという逆説だった。技術官僚はますます諸都市の二元管理を強め、資本主義<sup>キャピタリズム</sup>は層いつそう諸都市を首都に従属させ、あるいは首都のコピーにする。人間が家畜を載せる列車に詰め込まれて実験に供せられる。若者はおのれをして機械兵器の一部品たらしめ、敵艦への突撃を死にいたるまで反復する……。全体主義の危機はつねにここから生じているが、ここで、人間の類的本質がテクノロジーによつて篡奪されているという古い疎外論に回帰することはむろんできない。むしろ、このことはどうみても、人間の生物学的根幹から生じた自然史的事態である。

人間の手によつて生み出されると同時にその手を離れた、言い換えれば、制御するほどに制御不能となる、この奇怪な世界構造のはじまった時代こそ近代と呼ぶなら、この意味での近代を批判するために、われわれは人間存在についての、もっと別種の哲学を必要としている。いまやテクノロジーをたんに否定することは俄然不可能である。だがそれでも、可能な問いはある。考えてみれば当たり前のことだが、こう問うべきだったのだ——真なる想像<sup>イメジ</sup>は、真の創造

はいかに到来するのか、そして、現実と精神とをつなぐテクノロジーを、われわれひとりひとりの強さへの意志にかえるにはどうすればよいのか——。これらを既存の国家に回収させようとする古い学知は、できるだけはやく捨て去らねばならない。テクノロジーは、ますますわれわれから意志の余地を奪っているからである。

海山を均し、前近代の世界を一変させたテクノロジーがもたらした自由を、われわれは何の気なしに享受している。だがその自由が、かつての山陰や水底に似た暗がりを作り出しているとしたら。前近代のひとびとを閉ざされた空間に縛り付けていた海山の起伏がもたらす運命と同じものを、もたらしているかもしれない。

それは、けっして中立でも公平でも、ましてや純粹でもない。おそらくそこには、近代始まって以来の、なにかの傾向が存在している。いまや第二の自然というべきテクノロジーが自由の名のもとにつくりあげた不可視の桎梏——近現代史家の課題は、見慣れた疑似ユークリッド空間に混じった、あるかなきかの起伏に触れる勇氣をもつことではないか。

\*

明治天皇は死後、遺詔どおり京都の南、東京と京都をつなぐ街道を見下ろす桃山に葬られた。《旅》にとって目的地にたどりつくことはその終わりを意味し、出発地は途上にあつて故郷となる。彼の人生は未踏の地をゆく旅そのものであり、旅の終わりはその死で

あつた。彼は故郷へ帰つた。彼は志士たちのもたらした維新の意味を、よく理解していたにちがいない。道を歩きたび新しい日本を開示しながら、真の意味で、時代を跨いだ旅人のひとりだつたように、わたしには思われる。

- ★1 石母田正『平家物語』岩波新書、一九五七年、三〇四頁。
- ★2 『都風流トコトシヤレ節』（当時の瓦版）早稲田大学図書館所蔵。
- ★3 山路愛山はこういつていた。「新体詩家宜しく音楽の理に於て通ずる所あるべし、音と人心との關係に於て詳かにする所あるべし。斯の如くにして詩形始めて生ぜん。…曰くオツベケペー、曰くトコトシヤレ、其音に意なくして、其声は即ち自ら人を動かすに足る。」（『詩人論』『国民新聞』一八九三年八月六、二二、二〇日）。
- ★4 ベネディクト・アンダーソン（白石隆・白石さや訳）『定本想像の共同体——ナシヨナリズムの起源と流行』書籍工房早山、二〇〇七年。
- ★5 柄谷行人『世界共和国へ——資本ⅡネーションⅡ国家を超えて』岩波書店、二〇〇六年、『日本近代文学の起源 定本柄谷行人集』第一巻、岩波書店、二〇〇四年、『ネーションと美学 定本柄谷行人集』第四巻、岩波書店、二〇〇四年など。
- ★6 大澤真幸『ナシヨナリズムの由来』講談社、二〇〇七年。
- ★7 萱野稔人『国家とはなにか』以文社、二〇〇五年。
- ★8 イマニユエル・カント（篠田英雄訳）『純粋理性批判』岩波書店、一九六一年、八九〜九七頁。
- ★9 デイオゲネス・ラエルティオス（加来彰俊訳）『ギリシア哲学者

列伝 中』岩波文庫、一九八九年、三四頁。

★10 陳寿『三国志』三、魏書(三)、中華書局、八五八頁。

★11 フェルナン・ブローデル(浜名優美訳)『地中海』第一巻、藤原書店、二〇〇四年、五五〜六頁。

★12 同前、一六四頁。

★13 同前、九四〜六頁。

★14 『続日本紀』巻第一、天長十年(八三三)五月丁酉条。

★15 鈴木景二「飛鳥周辺の宮と遺跡」『日本の歴史』第三号、朝日新聞出版、二〇一三年、八九頁。

★16 オギュスタン・ベルク(宮原信訳)『空間の日本文化』筑摩書房、一九九四年、一三九頁。

★17 同前、一九〇〜七頁。

★18 『三国志』三、魏書(三)、八五四頁。

★19 網野善彦『日本』とは何か』講談社、二〇〇〇年。

★20 柳田國男「九州南部地方の民風」『斯民』一九〇九年四月、柳田國男全集』第二三巻、筑摩書房、二〇〇六年、六三〇〜一頁。

★21 網野、八三頁以下。

★22 小熊英二『単一民族神話の起源——「日本人」の自画像の系譜』新曜社、一九九五年。

★23 網野、二三六頁。「そして明治以降の政府、支配層によって意図的に国民に刷り込まれていく『日本国』の虚像の根底に、やはり文字の世界を通じて庶民生活に浸透し、その中に生きる『日本国』意識のあったことを確認するとともに、その両者がどのように関わっていたのかを追究するのも、これからの課題の一つにはなりうるであろう」。

★24 たとえば戦国時代において、織田家から豊臣家、徳川家にいたつ

て次第に諸大名が統一されていったという中央集権的常識は現実の歴史にあわない。むしろ、本能寺の変以後の織田家(家臣団)の分裂がかえって秀吉の天下統一を実現し、豊臣家の分裂が今度には江戸時代を生み出したとみるべきだろう。分裂のたびに、より下賤なものが高位に散乱したのであり、つまり日本の近世は、表面的な統合を背景に押しやるほど分裂が深まった結果ともいえる。

★25 柳田「旅と商業」『明治大正史世相篇』一九三二年、『全集』第五巻、四七一〜二頁。

★26 陳寿(今鷹真訳)『正史三国志』第三巻、筑摩書房、四〇一頁。

★27 正井泰夫『東京の生活地図』(時事通信社、一九七六年、一三二頁)によれば、一九七〇年代の東京にある一五万五六七六の交差点中、T字路が四つ辻の二倍ある。ベルクも、前掲書(一六三頁)でヨーロッパ諸国の首都と比較して、この点を特筆している。

★28 ジル・ドウルーズ&フェリックス・ガタリ(宇野邦一ほか訳)『千のプラトール』河出書房新社、一九九四年、四〇五〜七八頁。

★29 鹿児島県歴史資料センター黎明館編『鎌田正純日記』三、鹿児島県、一九九一年、八二五〜六頁。

★30 同前、八三〇〜一頁。

★31 同前、八三三頁。

★32 大脇兵右衛門信興『年内諸事日記帳』藤村記念館蔵、引用は『藤村全集』第五巻、筑摩書房、一九六八年、三三三頁。

★33 ブローデル『地中海』第一巻、一七頁。

★34 『鎌田正純日記』三、八三〇頁。

★35 脇田森左衛門晴雲『薩英戦争絵巻巻物』一八六四年五月(写)、文久三年薩英戦闘(虎嘯)日乗、『文久三亥六月廿八日英国軍艦薩州山川港江渡来戦争聞書』、『前之浜江異国船七艘到来之上及砲戦

- 候覚』、『英国軍艦渡来戦争実見聞日記 元治元年甲子七月於京都長州逆臣一戦実録』、『薩英戦大門口台場人数』、『馬関鹿児島砲撃始末』、『文久三癸亥年七月島津家ヨリ英国軍艦ヲ打払並鹿児島城略図』など(以上、鹿児島県立図書館所蔵)。
- ★36 *North China Herald* (関西大学図書館所蔵), Shanghai, Oct. 16, 1858.
- ★37 宮澤真一「英国系新聞に於ける薩英戦争の報道——Newspaper Library への Public Record Office の資料を中心にして——」『鹿児島経済大学社会学部論集』第五卷第三、四合併号、鹿児島経済大学社会学会、一九八七年、九六、一〇〇—一頁。
- ★38 ルイス・マンフォード『都市の文化』(生田勉訳) 鹿島出版会、一九七四年、第一章。
- ★39 マックス・ヴェーバー(黒正蔵・青山秀夫訳)『一般社会経済史要論』下巻、岩波書店、一九五五年。
- ★40 折口信夫「民族史観における他界観念」(一九五二年一〇月)『折口信夫全集』第一六巻、中央公論社、一九五六年、三三二頁。ドゥルーズ&ガタリ、四八九頁。「都市とは道路の相関物である」。
- ★41 同前、四八五頁下段。
- ★42 フュステル・ド・クーランジュ(田辺貞之助訳)『古代都市』白水社、一九九五年(原著一八六四年)。
- ★43 鈴木一州訳「ローマ市建設以来の歴史」『論集』第二巻、神戸大学、一九七八年、一三頁の Magistrate についての註を参照のこと。
- ★44 たとえばアンリ・ルフェーブル(森本和夫訳)『都市への権利』筑摩書房、二〇一二年(原著一九六八年)、一一頁、藤田弘夫『都市と国家』ミネルヴァ書房、一九八九年、七頁ほか。
- ★45 プロードル(村上光彦訳)『日常性の構造』第二巻、みずす書房、一九八五年、二五七、二六八、二七八頁。ただし、訳文はドウルーズ&ガタリ前掲書四九一頁の引用文を参照した。
- ★46 たとえば広瀬和夫『日本古代史 都市と神殿の誕生』新人物往来社、一九九八年、『日本考古学の通説を疑う』洋泉社、二〇〇三年ほか。ドウルーズとガタリがいうように(前掲書)、国家や都市が生産様式に依存しないで成立するなら、ゴードン・チャイルドのいう新石器革命以前に都市を見出すことも可能だろう。
- ★47 たとえば寺崎保広「古代都市論」『岩波講座日本通史 古代4』第五巻、岩波書店、一九九五年。古代都市の成立を、氏族制から官僚制への移行にもとづくとする。
- ★48 岡部精一『東京寛都の真相』仁友社、一九一七年以来の主題である。
- ★49 大槻文彦編『言海』第四冊、大槻文彦、一八九一年。
- ★50 島崎藤村『夜明け前』『島崎藤村全集』第二六巻、筑摩書房、一九五六年、五二〜三頁。
- ★51 折口「真間・蘆屋の昔がたり」『国学院雑誌』第五二巻第一号、一九五二年四月、『折口信夫全集』第二九巻、四〇一〜三頁。
- ★52 『年内諸事日記帳』藤村全集『第一五巻、三九六頁。
- ★53 佐々木克「東京「遷都」の政治過程」『人文学報』第六六号、一九九〇年、四一頁ほか。
- ★54 平野国臣顕彰会編『平野国臣伝記及遺稿』博文社書店、一九一六年、四六頁。
- ★55 佐々木、四二頁。
- ★56 真木保臣先生顕彰会編『真木和泉守遺文』伯爵有馬家修史所、一九一三年、三二〜三頁。
- ★57 立教大学文学部史学科日本史研究室編『大久保利通関係文書』第一、吉川弘文館、一九六五年、六一頁。
- ★58 大久保利和ほか編『大久保利通文書』第二、早川純三郎

一九二七年、一九一頁以下。

★59 渡辺信一郎『天空の玉座』柏書房、一九九六年。

★60 東京市編『東京市史稿』皇城篇第四、一九一六年、四九〇～五〇頁。

★61 前島密『鴻爪痕』前島彌、一九二〇年、自叙伝、六六頁以下。

★62 高木博志「東京奠都と留守官」『日本史研究』二九六号、日本史研究会、一九八七年。

★63 明治天皇聖蹟保存会編『明治天皇行幸年表』大行堂、一九三三年。

「想像の共同体」概念を批判しつつ、天皇・皇太子の行幸啓を臣民の「視覚的支配」とみた考察に原武史「可視化された帝国」増補版』（みすず書房、二〇一二年）がある。しかし、天皇の移動を「視覚」に結びつけるなら、イメージに注目したアンダーソンの議論の枠内に収まってしまふ（たとえば、各地の学校に下付された御真影の果たす役割と区別できない）。本稿の文脈でいえば、天皇の行幸を「統治の空間」にのみ位置づけていることになる。

★64 小路田泰直『日本近代都市史研究序説』柏書房、一九九一年、「天皇制と古都」中塚明編『古都論』柏書房、一九九四年所収。

★65 荻生徂徠「政談」『日本思想体系』第三六卷、岩波書店、一九七七年。

★66 太宰春台「経済録」『日本経済大典』第九卷、明治文献、一九七〇年。

★67 中江兆民「工族諸氏に告ぐ」『東雲新聞』一八八八年七月五～七日。

★68 福沢諭吉『文明論之概略』岩波文庫、一九九五年、一六四頁。

★69 同前、一三三頁。

★70 長谷川正安『昭和憲法史』岩波書店、一九六二年（明治憲法の制定によって仕上げをうけた明治国家においては、国家の全権力は、天皇を頂点とする軍隊・警察・官僚の手ににぎられていた。

……天皇が、その全権力の集約点に位置しているところから、この権力機構は天皇制とよばれる……。歴史的範疇としてみれば

ヨーロッパでも一般にみられた絶対君主制の日本的形態にすぎなかった」六、一九頁）など。こうした観点に対する批判的継承に安田浩『近代天皇制国家の歴史的位置』大月書店、二〇一一年、保立道久『歴史学をみつめ直す——封建制概念の放棄』校倉書房、二〇〇四年、柄谷、前掲『世界共和国へ』一一〇頁以下、ほか。

★71 吉村元男『空間の生態学』小学館、一九七六年、八三頁。

★72 ガブリエル・タルド（稲葉三千男訳）『世論と群衆』未來社、一九八九年、二、八一頁。なお、マーシャル・マクルーハン（『ゲーテンベルクの銀河系』活字人間の形成』森常治訳、みすず書房、一九八六年（原著一九六二年））の以下の言葉も参照のこと。「われわれがここ数世紀の間、「国民」の名で呼んできたものはグーテンベルクの印刷技術が出現する以前に発生したことはなかったし、また発生する可能性もなかったのである」（前書き二頁）。「ナシヨナリズムは印刷、そして透視図法および視覚的数量化とともに発生した「固定された視点」に依存し、またそれから由来している」（本文三三七頁）。ただし、われわれはフランス革命以後爆発的に発展する製紙技術にも注意を払うべきと考える。

★73 『年内諸事日記帳』『藤村全集』第一五巻、四四九～五〇頁。

★74 同前、五〇三頁。

★75 前島『鴻爪痕』郵便創業談、八六～七頁。

★76 プロードル『地中海』第一巻、三五頁。

★77 デイヴィッド・リース（原潔・永岡敦訳）『ドイツ歴史学者の天皇家観』新人物往来社、一九八八年、一二五頁。

★78 宮澤、一〇〇～一頁。

★79 Thomas J. Misa, *Leonardo to Internet*, John Hopkins University press, 2004, p. 107.

- ★ 80 Ibid., pp. 107-9.
- ★ 81 Ibid., p. 97.
- ★ 82 マルティン・ハイデガー（関口浩訳）「技術への問い」『技術への問い』平凡社、二〇〇九年。「用立て *bestellen*」の概念についての考察を参照のこと。
- ★ 83 拙稿「技術史の臨界」『史創』第三号、史創研究会、二〇一三年で詳述。
- ★ 84 タルド、八四頁。
- ★ 85 アンドレ・ルロワグーラン（荒木亨訳）『身ふりと言葉』筑摩書房、二〇一二年、二九四～五頁。
- ★ 86 ヴェーバー（濱嶋朗訳）『権力と支配』講談社、二〇一二年、二四四頁。
- ★ 87 同前、四四頁。
- ★ 88 マンフォード、一五二頁。
- ★ 89 同前、二九〇～九頁。
- ★ 90 プロードル『日常性の構造』第二巻、二二二頁。
- ★ 91 ヴェーバー、四七頁。
- ★ 92 カール・ヴィットフォージェル（湯浅赳男訳）『オリエンタル・デスポティズム』新評論、一九九一年。水力社会としての東洋に生まれた専制官僚国家、ソ連および中国の考察を参照のこと。
- ★ 93 ベルナル・ステイグレル（西兼志訳）『技術と時間』エビメテウスの過失』法政大学出版社、二〇〇九年、五七頁。
- ★ 94 同前、五九～六七頁。 Cf. André Leroi-Gourhan, *L'Homme et la Matière*, Albin Michel, 1943, p. 13 et passim.
- ★ 95 タルド、二二二～二九～四七頁。
- ★ 96 岩倉具視「国体昭明政体確立意見書」一八七〇年八月九日、『岩倉具視関係文書』第一、日本史協同会、一九三五年、三五九頁、同「大藩同心意見書」一八七二年四月、同第八、一七三頁。
- ★ 97 ルロワグーラン、五〇八頁。
- ★ 98 青木栄一『鉄道忌避伝説の謎』吉川弘文館、二〇〇六年。
- ★ 99 プロードル『日常性の構造』第二巻、二五八頁。
- ★ 100 神野志隆光『日本』とは何か』講談社、二〇〇五年。東野治之『遣唐使と正倉院』岩波書店、一九九二年。
- ★ 101 村井章介『アジアのなかの中世日本』校倉書房、一九八八年、一四四頁、網野、二二八頁。
- ★ 102 石川啄木「一握の砂」『啄木全集』第一巻、岩波書店、一九五三年、九頁。
- ★ 103 大石直正「中世の奥羽と北海道『えぞ』と『日のもと』北海道・東北史研究会編『北からの日本史』三省堂、一九八八年、入間田宣夫『中世武士団の自己認識』三弥井選書、一九九八年、網野一二三頁以下、など。
- ★ 104 角川源義『語り物文芸の発生』東京堂出版、一九七五年、林屋辰三郎『古代国家の解体』東京大学出版会、一九五五年、『南北朝』朝日新聞社、一九九一年、『内乱のなかの貴族——南北朝と「園太暦」の世界』角川書店、一九九一年ほか。
- ★ 105 『古事記祝詞』（倉野健司校注）岩波書店、一九五八年、一〇七～八頁。
- ★ 106 同前、一〇八頁。
- ★ 107 柄谷『世界共和国へ』一六七頁。
- ★ 108 同前、一七四頁。
- ★ 109 同前、一七八頁。
- ★ 110 プロードル『日常性の構造』第二巻、一三五頁。